

プログラム概要

目的と構想

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム 人類文化研究のための非文字資料の体系化

2002 年度から文部科学省が開始した「21 世紀 COE プログラム」は、世界的な研究拠点を構築するための大学支援策であり、大学院博士課程を持つ大学がその対象に採択されることを目指して競うこととなった。私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、2003 年度に学際・複合・新領域の分野で採択された。この計画は、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科と日本常民文化研究所、それに大学院外国語学研究科中国言語文化専攻が加わり、学際的に研究事業を展開する構想であった。実施にあたっては、事業推進担当者に加えて、COE 教員及び COE 共同研究員を制度化し、研究課題にかかわる学内外の多くの研究者に参加を要請し、共に研究に従事してもらい、目的を達成することにした。

今までの文化研究では文字に記録された事象に専ら関心が集中してきた。しかし、文字に表現されない人間の観念・知識・行為ははるかに幅広く、質量ともに大きい。それは文字で表現された事象とは比較にならない。私たちの事業は、これらのなかから（1）図像、（2）身体技法、（3）環境・景観の 3 つに絞って、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料を分析して発信することを目的としたものである。それぞれに幾つかの具体的課題を設定した。その組織は以下の通りである。

第 1 班 図像資料の体系化と情報発信

課題 1 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行

課題 2 『日本近世・近代生活絵引』の編纂

課題 3 『東アジア生活絵引』の編纂

第 2 班 身体技法および感性の資料化と体系化

課題 1 身体技法の比較研究

課題 2 用具と人間の動作の関係の分析

第 3 班 環境と景観の資料化と体系化

課題 1 景観の時系列的研究

課題 2 環境認識とその変遷の研究

課題 3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

そして、これら 3 つの非文字資料を統合し、世界に向かって発信する方法を開発することを課題に、以下の 3 つの研究班を編成した。

第 4 班 統合情報発信

第 5 班 実験展示

高度専門職学芸員養成プログラム

実験展示





1 図像資料の体系化と情報発信 Systematization of Pictorial Materials and Their Dissemination

- マルチ言語版「絵巻物による日本常民生活絵引」の編纂
Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan
- 「日本近世・近代生活絵引」の編纂
Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan
- 「東アジア生活絵引」の編纂
Pictopedia of Everyday Life in East Asia

2 身体技法および感性の資料化と体系化 Systematic Documentation of Techniques of Body, Senses and Folk Implements

- 身体技法の比較研究
Comparative Study of Techniques of Body and Senses
- 用具と人間の動作の関係の分析
Analysis of the Relationship between Folk Implements and Human Movement

3 環境と景観の資料化と体系化 Arrangement and Systematization of the Environment and Scenery

- 景観の時系列的な研究
Research for Scenery in History
- 環境認識とその変遷の研究
Research of Environmental Recognition and Its Changes
- 研究に刻印された人間活動および災害の痕跡解読
Interpretation of Traces of Human Activity and Natural Disasters Inscribed into the Environment

4 地域統合情報発信 Dissemination of Regional Information

5 実験展示 Experimental Exhibition on Fruits of COE Program Activities

6 理論総括研究 Summarization of COE Program Activities and Research Results

第 1 班 「図像資料の体系化と情報発信」

課題 1 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行

課題 2 『日本近世・近代生活絵引』の編纂

課題 3 『東アジア生活絵引』の編纂

第 1 班 「図像資料の体系化と情報発信」 総括

研究経過

1 班は、財団法人日本常民文化研究所が編纂した世界に誇るべき『絵巻物による日本常民生活絵引』全 5 巻を前提に、絵引という、図像を活用し、図像を窓口にして文化を把握するという、世界的に類例のない編纂方式を、普遍的な編纂方法として提示することを構想して発足した。旧来の言葉を窓口にして事物・事象を知る字引に対して、図像を窓口にして事物・事象を知る方法が絵引である。『絵巻物による日本常民生活絵引』を引き継ぎ、以下の 3 つの課題を掲げて、研究活動を発足させた。すなわち、課題 1 『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳を中心としマルチ言語版の編纂と出版、課題 2 『日本近世・近代生活絵引』の編纂とその一部の刊行開始、課題 3 『東アジア生活絵引』の編纂作業である。

なお、日本常民文化研究所が編纂したのは『絵巻物による日本常民生活絵引』とあるように「常民生活絵引」であったが、私どもの 21 世紀 COE プログラムは「常民生活絵引」ではなく、単なる「生活絵引」とした。常民は柳田国男が用い、民俗学の基本的な概念になったが、常民にこめられた意味は基本的に一国民俗学の枠組みであった。世界的な研究を推進するには不適切な言葉であると判断し、本プログラムでは常民を採用せず、単に生活とした。

1 班の活動は終始班としての活動を維持してきた。班員が課題に分属する方式をとらず、いずれの課題にもかかわる方式を採用した。班としての研究会を頻繁に開催し、そこで各課題の問題や成果を報告・検討してきた。その結果を具体化する 4 年度からは、各課題担当者を決め、それぞれ別れて研究作業を進めたが、完全に分離するのではなく、多くの班員が複数の課題に関わることで、班としての一体性の維持に努めるとともに、引き続き班研究会を開催した。



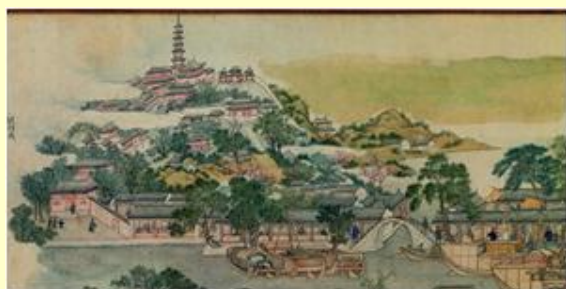
1 班としては公開ワークショップや講師を招いての公開研究会を開催して、研究実績を挙げている研究者からさまざまな刺激を受け、示唆を得る機会を設けるとともに、自分たちがおこなっている研究の内容や進捗状況を広く披露し、批判を得る機会を作った。

各人は自己の研究課題を班の課題との関連で設定し、その具体的な研究のために日本内外に調査に赴いた。また、国内の博物館における図像資料の企画展示に際し、展示資料の確認調査を班としておこなった。これらの調査も個人で個別に行うのではなく、班として実施し、また課題を超えて実施すると共に、課題達成のために明確な目標を設定して行った。

理科系の共同研究は、実験装置・分析装置を共同利用して、研究成果も共同のものとして生み出され、学術雑誌にその成果が発表される場合も、参画した研究者の連名で行われるのが一般的であるが、人文系は個人的な研究活動として展開し、その成果も個人の名前で発表される。1 班では、絵引編纂という共同課題を追求し、その成果も個人に還元するのではなく、共同研究としての成果としてまとまった絵引を完成させることに努力を傾注した。作業としては分担はするが、その内容を共同で検討し、共同の研究成果として、絵引を編纂し、それを刊行することを目指した。

研究成果

1 班としての成果は、先ず各課題ごとに刊行された絵引である。『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』2 冊、『日本近世生活絵引』3 冊、『東アジア生活絵引』2 冊と、全部で 7 冊におよぶ。先行して研究を進めたマルチ言語版の編纂過程で得た知見を、東アジア生活絵引に活用し、世界的に利用可能な絵引を目指して研究を行った。COE 研究員（PD・RA）の支援を得て、図像資料に関する文献の収集とその目録化を進め、『図像文献書誌情報目録』および『図像研究文献目録』を刊行した。前者は、近世・近代に描かれた図像が、近代の出版物のなかに再録されたり復刻されたものについての書誌情報であり、今までにないデータベースである。



さらに、生活絵引データベースの構築を進め、その一部をホームページ上で公開した。公開できたのは、『日本近世生活絵引』のうち東海道編の副産物としての『東海道名所図会』絵引データベース、『東アジア生活絵引』のうち朝鮮風俗画編の副産物としての『朝鮮風俗画』絵引データベースである。これらは、従来の文字による検索に加えて、図像からの検索を可能にする「絵引検索」を設定したところに特色がある。

第 1 班 課題 1 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行

● 研究經過



『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻のうち、第1巻と第2巻を対象に、描かれた事物に付された名称（キャプション）を英語、中国語、韓国語に訳し、さらに絵引に付された絵から読み取った解説文を英語訳して、世界的に利用可能な図像資料にするとともに、それを通して絵引という世界的に類のない図像活用方式を世界に提示して、世界的な共通方式にすることを目指した。

言葉を異なる文化に訳して示すことは多くの困難が伴うが、特に特定文化の過去の事象を多言語で示すことは簡単なことではないことが検討過程で明らかになり、それを克服するための検討に時間を多く割くことになった。そして、本プログラムの大きな目標の 1 つが、若手研究者の育成にあることに鑑み、異文化の言語に翻訳する基礎作業には、各言語を母国語とする博士課程在学中もしくは修了の日本社会・文化を専攻する留学生を依頼し、グループを組織して進めた。翻訳に参加したのは神奈川大学大学院の学生のみでなく、東京大学大学院その他の多くの留学生である。この若手研究者である留学生諸氏の尽力によって訳出された各言語の内容を、班員が詳細に検討し、適切な語彙を確定した。

この翻訳・校閲の過程で、『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の問題点も明らかになってきた。当時の研究水準に規定されて、必ずしも適切な語彙が選択されていないことが判明した。そのため、『絵巻物による日本常民生活絵引』そのものの改訂も考えられたが、今回はあくまでも原著を前提に編纂することに重点を置き、間違いについては最小限の訂正に止めた。また、短歌や長文の引用文は、他言語に訳出することが困難であり、要約して訳したり、一部省略したりすることで、異文化からの理解を容易にするよう工夫した。

● 研究成果

『絵巻物による日本常民生活絵引』は全 5 巻の刊行物であるが、今回の 21 世紀 COE プログラムの 5 年間では、そのうちの第 1 巻と第 2 巻をマルチ言語版として編纂し、刊行することにした。それぞれ、本文編と語彙編の 2 分冊で編成した。本文編は、『絵巻物による日本常民生活絵引』の図像、キャプション、読み取り解説を英文によって表記するもので、英文版『絵巻物による日本常民生活絵引』としての性格を有する。英語を解する人々にとっては、この本文編のみで日本文化を研究する際の工具書となるし、また日本中世史を図像から理解する案内書となる。しかし、本文編に加えて語彙編を編纂した。こちらは英語、日本語、中国語、韓国語をキャプション番号に対応させて比較対照できるようにしたものである。日本の事象を各言語でどのように表現するのかを検

討する格好の資料集であり、また各言語から『絵巻物による日本常民生活絵引』を読み、利用できるようにしたものである。

English	Japanese	Chinese	Korean
18 barefoot	18 裸足〔はだし〕	18 赤脚	18 맨발
19 samurai-eboshi	19 侍烏帽子 〔さむらいえぼし〕	19 武士烏帽子	19 건 (사무라이에보시)
20 resting on an ichimegasa	20 市女笠によりかかる	20 靠在斗笠上	20 삿갓에 기대다
21 ichimegasa	21 市女笠〔いちめがさ〕	21 斗笠〔市女笠〕	21 삿갓
22 foldable umbrella	22 妻折傘〔つまorigasa〕	22 弯边伞	22 긴 자루 양산
188 Women's Clothing and Zukin	188 女の服装・頭巾	188 女式服装和头巾	188 여자 복장・두건
① informal palanquin	① 張輿	① 轿子	① 산어
2 palanquin roof	2 屋形〔やかた〕	2 屋形轿顶	2 가옥형 지붕
3 cornerboard	3 輿の袖	3 轿口的把手	3 산여의 앞글
4 window	4 物見	4 轿窗	4 구경
5 carrying pole	5 轎〔ながえ〕	5 轿杆	5 나뭇
6 zukin	6 頭巾〔ずきん〕	6 头巾	6 두건
7 reins	7 手綱〔たづな〕	7 绳子	7 고삐
8 priestly robes	8 法衣〔ほうえ〕	8 法衣	8 법의
9 hakama	9 袴〔はかま〕	9 裙裤	9 바지 (하카마)
10 ichimegasa	10 市女笠〔いちめがさ〕	10 斗笠〔市女笠〕	10 삿갓
11 uchikake	11 打掛〔うちかけ〕	11 长窄袖和服〔打掛〕	11 덧옷 (우치카케)
12 wearing one's hair down	12 下げ髪	12 束发	12 늘어뜨린 머리
13 cord for tying the hair	13 元結〔もとゆい〕	13 束发带	13 머리끈
14 zukin (with a headband)	14 頭巾〔鉢巻〕	14 头巾〔鉢巻式〕	14 두건 (머리띠)
⑮ child	⑮ 小童	⑮ 小孩	⑮ 소동
16 untidy hair	16 放ち髪	16 女童的乱发	16 산발머리
17 shaved head	17 円頭	17 和尚头	17 깎아머리
18 zukin	18 頭巾	18 头巾	18 두건
19 kesa	19 袈裟〔けさ〕	19 袈裟	19 가사
20 table	20 四脚	20 四脚方桌	20 탁자
21 table leg	21 四脚のあし	21 桌腿	21 탁자 다리
189 Traveling Attire	189 旅装	189 旅行服	189 행장
① arched bridge	① 反橋〔そりばし〕	① 拱桥	① 홍예교
2 bridge pier post	2 橋杭	2 桥桩	2 교각
3 ornamented pillar	3 親柱〔擬宝珠柱〕	3 栏柱〔顶端呈宝珠形〕	3 법수기둥 (보주 장식)
4 design on the bridge flooring	4 橋板の飾り	4 桥板侧面的装饰	4 다리 널판의 장식
5 plank used for bridge	5 橋板	5 桥板	5 다리 널판
6 railings	6 欄干〔らんかん〕	6 栏杆	6 난간
7 short supporting post	7 束〔つか〕	7 短柱	7 등마리
8 ichimegasa	8 市女笠〔いちめがさ〕	8 斗笠〔市女笠〕	8 삿갓
9 ribbon to tuck up woman's clothing	9 掛褌〔かけだすき〕	9 衣带	9 소매 끈
10 uchigi	10 桂〔うちぎ〕	10 夹袄	10 길옷 (우치기)
11 tate-eboshi	11 立烏帽子〔たてえぼし〕	11 高黑帽	11 건 (타테에보시)
12 kariginu	12 狩衣〔かりぎぬ〕	12 猎衣	12 평상복 (카리기누)
13 fan	13 扇子	13 扇子	13 접부채
14 hakama	14 袴〔はかま〕	14 裙裤	14 바지 (하카마)
15 zukin	15 頭巾〔ずきん〕	15 头巾	15 두건

研究者（2008年3月31日 現在）

課題 1

事業推進担当者

前田 禎彦、 ジョン・ボチャラリ

共同研究員

君 康道

COE 教員

金 貞我

調査研究協力者

鈴木 彰、 蔡 文高

第1班 課題2 『日本近世・近代生活絵引』の編纂

● 研究経過

『絵巻物による日本常民生活絵引』の偉大な成果を前提に、かつて日本常民文化研究所が構想しつつも実現できなかった、日本近世・近代の生活絵引の編纂を課題にした。当初は近世生活絵引と近代生活絵引を並行して編纂を進める予定にしていたが、実際の編纂計画を策定する中で困難が予想されたので、今回の21世紀COEプログラムの5年間では日本近世生活絵引の編纂に集中し、日本近代生活絵引の編纂は他日を期すことにした。

近世生活絵引きについては、北海道・蝦夷地編、日本本土編、琉球編という大枠での編纂を計画し、北海道・蝦夷地編について継続的に図像資料の所在調査を進め、図像も収集し、その中から絵引編纂に適切な図像を選択して、絵引編纂を進めた。中心となったのは、菅江真澄の描いた図像である。他方、琉球編については、図像資料所在調査を進め、その所在情報をほぼ入手したが、並行しての調査は困難と判断し、北海道・蝦夷地の編纂を終了後におこなうことにした。日本本土については膨大な図像資料が存在し、それをどのように絵引きにまとめるかは大きな問題であり、検討を重ねた結果、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する図像資料を対象にすることにしたが、検討の結果、同じ種類の図像で、より内容が豊かな表現描写がある『農業図絵』を用いて北陸編の編纂をおこなうこと、また21世紀COEプログラムが入手した『東海道名所図会』による絵引編纂をおこなうことにした。

日本近世生活絵引は、以上のように、北海道・蝦夷地編、北陸編、東海道編の3冊の絵引編纂を進めた。『絵巻物による日本常民生活絵引』に倣い、対象作品から生活文化を描いている部分を適格に切り取り、そこに描かれている事物、また人物の行為をとりだして番号をつけ、その事物や行為を示す言葉をキャプションとして表示した。近世に描かれた図像を用いて、近世の生活絵引を編纂するのであるから、表示する語彙も近世に用いられたものをできるだけ確認しつつ掲げるようにしたが、これが予想外に困難な作業であり、実際には近世にその地で何と呼んでいたか分からない場合が多く、一般的な現代表現を採用せざるを得なかったキャプションも多い。またアイヌの人々の生活文化を日本語で表現することも非常に困難な問題であった。これら試行錯誤を通しての検討において共同研究の真価が発揮された。この間、講師を招いての各種研究会を開催し、現地調査を実施した。またそれぞれの資料について研究を重ね、蓄積のある多くの研究者の教示を得た。



研究成果

共同研究方式による編纂書として、『日本近世生活絵引』北海道編、東海道編、北陸編の3冊を刊行することができた。それぞれ絵引としては試案本ともいうべきものであり、十分に完成したものではない。しかも、それぞれの研究状況を反映して、統一した形式の絵引にはなっていない。むしろ絵引の方式としてどのような構成・組み立てがふさわしいかを検討するための材料になるように、それぞれ異なる形式の絵引とした。北海道編は、事項に対するキャプションは必ずしも多くないが、詳細な読み取り解説を付け、現代の研究水準を示した。東海道編は、『絵巻物による日本常民生活絵引』の方式を踏襲して、選択した図について事項キャプション、読み取り解説をつけた。北陸編は、農書としての図像部分は簡略にし、金沢城下の生活を重点的に取り上げ、絵引化した。

印刷刊行した3冊の絵引に加えて、副産物としての絵引データベースを作成して公開した。データベースは、3冊すべてではなく、『東海道名所図会』についての絵引データベースのみを今回は公開した。従来のデータベースは文字から検索して、目的のデータに達することを基本にしてきた。今回のデータベースでも、文字を入力して検索する方式に多くの利用者がなれていることもあって、これを字引検索という名称を与えて設定したが、加えて絵引データベースの真価を発揮するための図像から検索する方式を模索し、データベースの検索窓口として絵引検索を設定した。



研究者(2008年3月31日 現在)

課題2

事業推進担当者

田島 佳也、西 和夫、福田 アジオ

COE 教員

中村 ひろ子

共同研究員

菊池 勇夫

調査研究協力者

泉 雅博、 富澤 達三、 山本 志乃

第 1 班 課題 3 『東アジア生活絵引』の編纂

・ 研究経過

日本で考え出された絵引という情報整理と発信の方式が、日本以外の社会、文化においても可能かどうかを検討するために、東アジアの 2 つの文化について絵引編纂をおこなうことを課題に設定した。1 つは中国であり、もう 1 つは朝鮮半島である。日本では中世でも図像が豊富で、絵引編纂を可能にするほどの量が残されていたし、まして近世以降になると日常生活のなかに図像が豊富に入り、人々は図像に接し、また時には写生や模式として自ら図像を作成し、情報伝達や記録として残すこともおこなわれてきた。絵引編纂の前提は、各時代がすでに作り上げていた。それに対して、東アジアの諸地域では、図像と日常生活の間は日本ほどに近く、親しみのあるものではなかったことが分かってきた。確かに絵画が多く制作され、家の中に飾られることも少なくなかったが、山水画や花鳥画に示されているように、そこに描かれた内容は実際の景色や人々の生活ではなく、理念化された風景であり、人間であった。そのため、絵引編纂の対象となるような写實的に生活場面を描いた図像を探し出すことに多くの時間を費やした。種々検討した結果、中国については 18 世紀の蘇州を描いた 12 メートルに及ぶ画卷「姑蘇繁華図」に注目し、「姑蘇繁華図」にもとづく生活絵引編纂をおこない、『東アジア生活絵引』中国江南編として完成させることにした。朝鮮半島については、やはり 18 世紀を中心に多く描かれた風俗画のなかで生活を描いたものを選択して絵引編纂をおこない、『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編とすることにした。

絵引編纂をおこなうためには、印刷刊行された図録類のみに頼っていたのでは、その詳細を把握することはできない。実際に作品を熟覧して、描写を子細に観察し、特徴を把握することが必要である。5 年間の共同研究の過程で、中国および韓国を訪れ、現地において所蔵機関の厚意ある対応で、各作品の熟覧をした。また中国の「姑蘇繁華図」は江蘇省蘇州を描く絵画であるから、写實的であればあるほど、現地調査をし、現地の比定をすることが必要である。そのために数次に及び現地調査をおこなった。そして、中国および韓国の研究者との研究会も催し、それらの絵画についての研究蓄積から学んだ。

中国江南編については、「姑蘇繁華図」から 50 場面を切り取り、それについて事物と行為に番号をつけ、キャプションを与え、また場面全体の読み取りをおこなった。朝鮮風俗画編の場合は、朝鮮時代の風俗画の中から生活を比較的具体的に描いている 6 作品を選び、それらのなかから生活場面を示す 50 余りを選択して、絵引編纂の対象とした。絵引編纂を開始してみると、多くの問題点が浮上して、困難を極めた。最も大きな問題は、中国および朝鮮半島の生活を日本語で把握し表記することの困難性であった。事物を知っても、それを日本で誤解されないように日本語で表記することは、単なる語学辞典で訳を取りだして当てはめることではすまないことが明らかになり、1 つ 1 つの語の適切なキャプションつけに多くの時間を割くことになり、最後までその検討と修正は続いた。次には、日本には存在しなかったり、類似のものもなかったりする事物も、同じ東アジアでも生活面では少なくないことが明らかになってきた。キャプションつけがこの点でも難しいことが判明した。この点を少しでも克服するために、朝鮮風俗画編では、1 つはキャプションを日本語表記と韓国語（ハングル）表記の 2 本立てにすることで理解しやすくし、さらに巻末の索引に難解重要単語に簡単な解説文をつけることを試みた。これらは今後の韓国文化理解にも大いに参考になるものと自負している。そして、この過程を共同研究として進め、1 つの作品に結実させたことは、人文系の共同研究のあり方をも示したものと考えている。

研究成果は『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編の2冊として印刷刊行した。いずれもカラーの作品であるので、その特長を生かして、絵引もカラー印刷にした。中国江南編は、日本語表記に必要な応じて中国語を併記して、誤解が生じないように工夫したが、全体としては現代日本語によるキャプションとなった。朝鮮風俗画編は日本語キャプションだけでなく、総ての語彙に韓国語（ハングル）でのキャプションをつけた。



また必要であるということを示すことができた。

さらにデータベースの作成にも取り組んだ。今回公開の準備をしたのは、朝鮮風俗画についての絵引データベースである。これは絵を窓口にして検索できるように組み立て、しかも日本語のみでなく、韓国語や英語による検索もできるように工夫をしている。

研究者（2008年3月31日 現在）

課題3

事業推進担当者 鈴木 陽一、 福田 アジオ

COE 教員 金 貞我

共同研究員 佐々木 睦

調査研究協力者 中野 泰、 韓 東洙、 嚴 明、 尹 賢鎮、 鄭 淳英

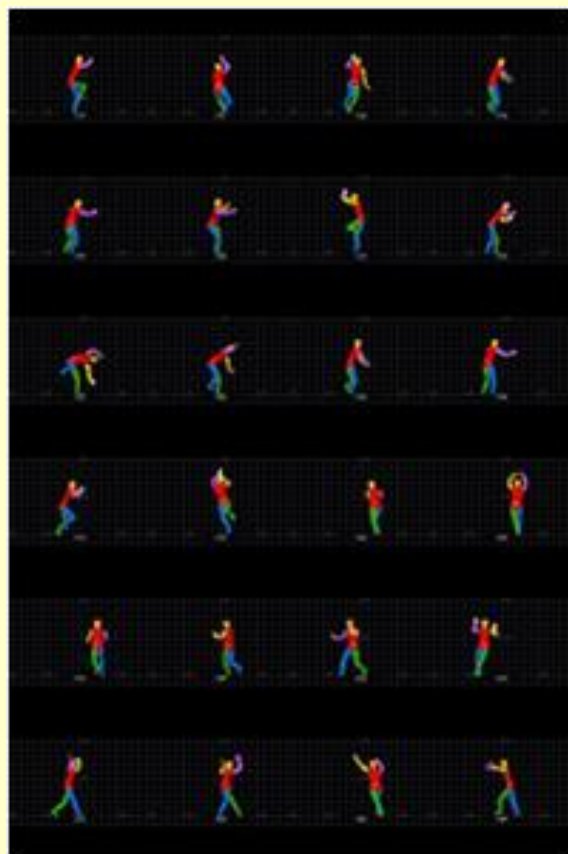
第 2 班 「身体技法および感性の資料化と体系化」

課題 1 『身体技法の比較研究』

課題 2 『用具と人間の動作の関係の分析』

2 班 「身体技法および感性の資料化と体系化」 総括

身体技法、つまり文化によって条件づけられた身体の使い方の比較研究については、人類史的立場から総合的に取り組み、その位置づけをより明確にするために、フランス、アフリカ、メキシコ、モンゴルなどを選び、調査をおこなった。一方、芸能研究のフィールドワークとしての取り組みとして、中国、日本をフィールドとして、角度変化のデータを直接取得できる磁気式モーションキャプチャを用いて東アジアの民俗芸能と伝統芸能の定量比較をおこなった。

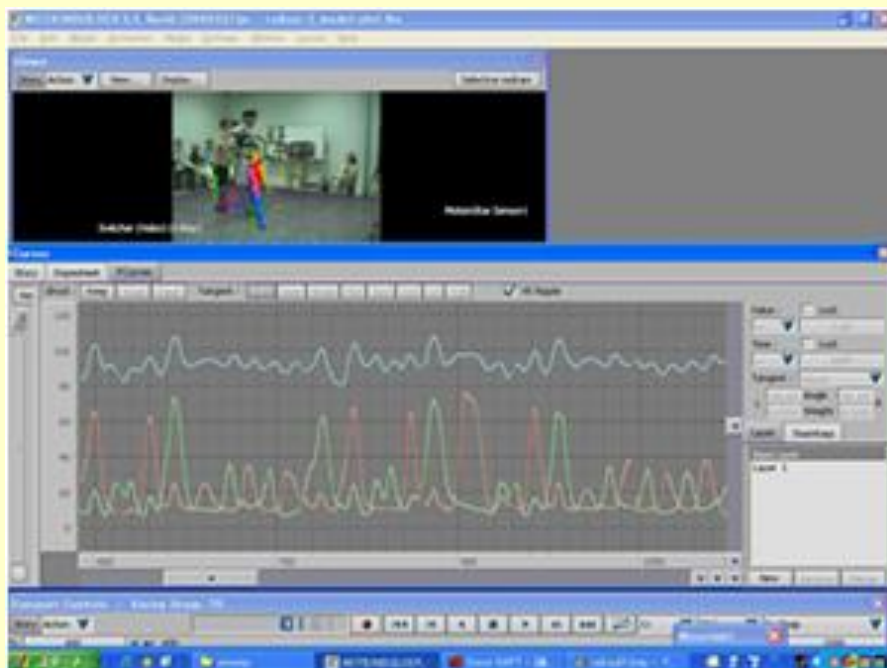


用具と人間の動作の関係については、身体技法研究を通して何が見えてくるのかという視点から、東北地方・中部地方の木摺臼の形態比較に取り組んだ。木摺臼の形態の違いから作業姿勢が復元でき、作業姿勢は使い手の身体技法に規定されることから、日本列島に暮らしてきた人々の身体技法の違いを復元し、そこから古墳時代日本列島の民族分布をさぐるという構想をもった。

2 班 課題 1 身体技法の比較研究

・ 研究経過

人類史的立場からの総合的な取り組みとしては、日本・フランス・西アフリカの比較研究を通して「三角測量による文化比較」（2004）などを発表し、2005 年の第 1 回国際シンポジウムでは基調講演「非文字資料から見る人類文化」をおこなった。また、2004 年 8 月にメキシコ調査、2004 年 9 月に中国内蒙古調査、2005 年 7 月にモンゴル調査を実施した。さらに、感性に関しては 2005 年 12 月、フランスで調査をおこない、嗅覚についての考察を深めた。



芸能研究のフィールドワーク分野においては、「身体技法と感性の接点に位置する芸能の身体表現のデータ化と定量比較」と題して、モーションキャプチャによる芸能の定量比較に取り組んだ。「型」によって身体表現が定型化・様式化される伝統芸能では、上演の場として舞台を意識するが、他方、民俗芸能は、祭儀の場を上演の場とし、神と人が一体となり、人々の希求する祓い清めや招福を意図した跳躍や、旋回の舞踊が繰り返される。この対照的な 2 つの芸能を比較するため、伝統芸能では能楽の観世流シテ方、民俗芸能では、奥三河花祭り、中国江西省南豊県石郵村の儺舞の演者の実演によるデータを収録した。

・ 研究成果

「非文字資料を検討する前提としての感性の諸領域についての考察」および「非文字資料としての身体技法の諸相についての考察」の2点を中心に考察を深め、以下の成果を得た。前者については、直立二足歩行の進化の過程で発達させ、退化させてきた諸感覚を、ヒトの文化全体、および、二重分節性をもった音声言語と、視覚二次元表象としての文字の特性との関連で考察した。後者については、運搬の身体技法、作業姿勢における身体技法、舞踊における身体技法を、多文化間の比較によって検討した。主に対象とした文化は、日本、中国、モンゴル、フランスを始めとするヨーロッパ、ブルキナファソを始めとする西アフリカ、メキシコ、ブラジルなどである。



芸能のフィールドワークでは、身体表現が伝達しようとする心情や事柄と動作の間に普遍的に共通するものがあるかどうかを見出すため、モーションキャプチャを用いて、舞踊動作データを14個の関節をもつ人体モデルの形式に当てはめた映像の解析を進めた。得られた結果を統計学的に処理し、動作特徴の抽出を試みた。またマジカルなステップとして花祭りの反閑のステップの分析をおこない、モーションキャプチャデータの全方向から観察できる利点を活用した。キャラクタが動く映像を正面からの固定画面で出力した映像データに仕上げ、DVDにして付した。

研究者（2008年3月31日 現在）

課題 1

事業推進担当者

廣田 律子、山口 建治

共同研究員

夏 宇継、川田 順造

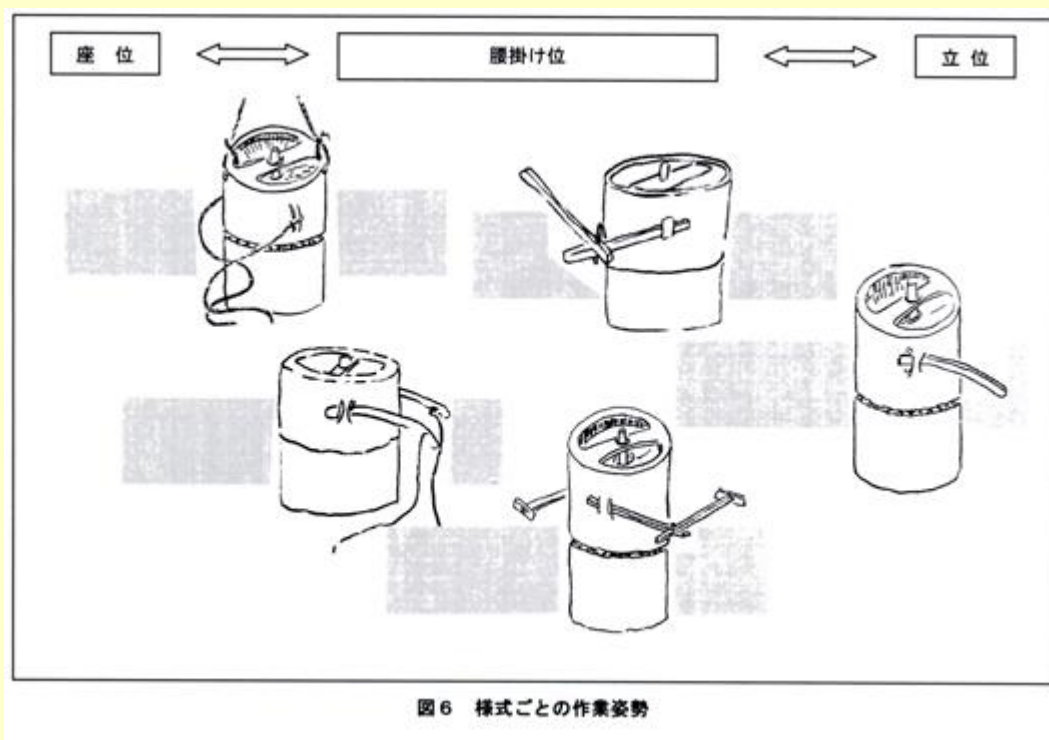
調査研究協力者

岡本 浩一、海賀 孝明

2 班 課題 2 用具と人間の動作の関係の分析

● 研究経過

近世以来、研究者によって注目されてきた「東日本と西日本の文化の違い」のベースには、日本列島の民族分布の違いが横たわっているであろうとの見通しから、「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復元」を第 1 のテーマとして、木摺臼の分布調査に取り組んだ。そのため、2003 年度は青森・岩手・宮城県を中心に延べ 39 日で 90 ヶ所、2004 年度は秋田・山形・福島県を中心に延べ 49 日 126 ヶ所、2005 年度は中部地方を中心に延べ 54 日 171 ヶ所、2006 年度は中部地方の追加調査で延べ 16 日 27 ヶ所を調査した。また、収蔵庫には在来犁もあることから、調査担当者が積み重ねてきた在来犁調査を並行して行い、在来犁から地域ごとの古代史を復元するという“民具からの歴史学”を目指した「民具という非文字資料の体系化のための在来犁の比較調査」を第 2 のテーマとして取り組んだ。



● 研究成果

身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復元に関しては、東北地方の各地における調査結果から、外来の弥生人が日本列島に持ち込んだ鍬は、鍬平の板に柄を柄組みするのが一般的であるが、東北地方では幹から枝分かれする部位を使って鍬平と柄を一本造りで削りだすものが広く見られることを突き止めた。一本造りは森の民、縄文人に顕著な事実であることからして、木摺臼の立位移行は縄文人の身体技法に基づくものという仮説を検証した。

また、在来犁の比較調査においては、長野、富山、石川県の直轄長床犁が在来犁の基本系であるのに対し、山梨県では三角枠無床犁が在来犁の基本であることを調査を通じて確認した。その結果、混血型や非混血型など犁型から 6 世紀と 7 世紀の時代を読み分ける方法の妥当性が中部地方の犁からも検証できた。



研究者（2008年3月31日 現在）

課題 2

事業推進担当者

河野 通明

第 3 班 「身体技法および感性の資料化と体系化」

課題 1 景観の時系列的な研究

課題 2 環境認識とその変遷の研究

課題 3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

第3班 「環境と景観の資料化と体系化」 総括

第3班は当初「景観の時系列的研究」、「環境認識とその変遷の研究」、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」の3グループがそれぞれの課題を掲げ、研究調査を開始した。前半の3年間においては、3グループはそれぞれ有機的な関係を構築するための研究をおこなったが、2006年度には班全体の再編成がなされ、他の班からも新しくメンバーを迎えて進める調査・研究体制ができあがった。その体制の下ではグループ固有の研究課題の追求が優先されることとなり、相互の関連性を追求する面は後退したが、課題内部においては、それぞれ独自の研究成果を挙げる事ができた。

2004年度に刊行した『環境と景観の資料化と体系化にむけて』において環境と景観に関する民俗学、地理学、歴史学の異なる分野からのアプローチがおこなわれ、相互に共通認識を求める前提的作業を開始した。各領域をさらに深めるため、グループの再編成がおこなわれ、課題1「環境の時系列的研究」、課題2「環境認識とその変遷の研究」、課題3「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」に分かれ、それぞれの課題に応じた研究調査を展開した。課題1においては日本常民文化研究所が所蔵する「澁澤写真」の撮影場所の特定を中心とする調査分析、課題2においては西日本と東日本の特定地域を調査対象に定めたが、対象地が災害に見舞われるなどの事態が生じたため、調査が中断され、当初の計画が実行されなかった。後半2年間には中世鎌倉の発掘調査の考古学的成果から環境認識の変遷に関する考察を深めた。課題3においては海外神社跡地、租界、関東大震災の絵葉書を研究素材とする3組に分かれ、それぞれの調査分析をおこなった。その結果、人類文化としての非文字資料は、文字資料に対立的に存在するものではなく、文化総体のなかで補完関係にあることが研究成果において実証され、再確認された。また、多くの写真類が物語る現実はすでに失われた景観であるため、分析の妥当性を広く世に問うために、それぞれのグループが追求する課題に合わせた写真類のデータベース化を図り、公開することにした。



3 班 課題 1 景観の時系列的研究

● 研究経過

この班は、その作業の主軸を日本常民文化研究所所蔵の「湍澤写真」の追跡調査、その一般公開にむけての準備作業においた。

最初の3年間は今からほぼ70年前に撮影された「湍澤写真」の撮影場所の特定、またその作業にかかわるさまざまな聞き取りが中心となった。聞き取り作業は撮影時の証言を現地で求めることのほか、民俗学史の諸資料に基づき、撮影者を特定し、当人もしくはその遺族から当時の状況を少しでも洗い出すことを目的とした。日本常民文化研究所の「湍澤写真」にはネガフィルムがなく、その所有権には不確定な要素があるので、公開にさきがけて可能な限り写真の「由緒」を調べることとなった。

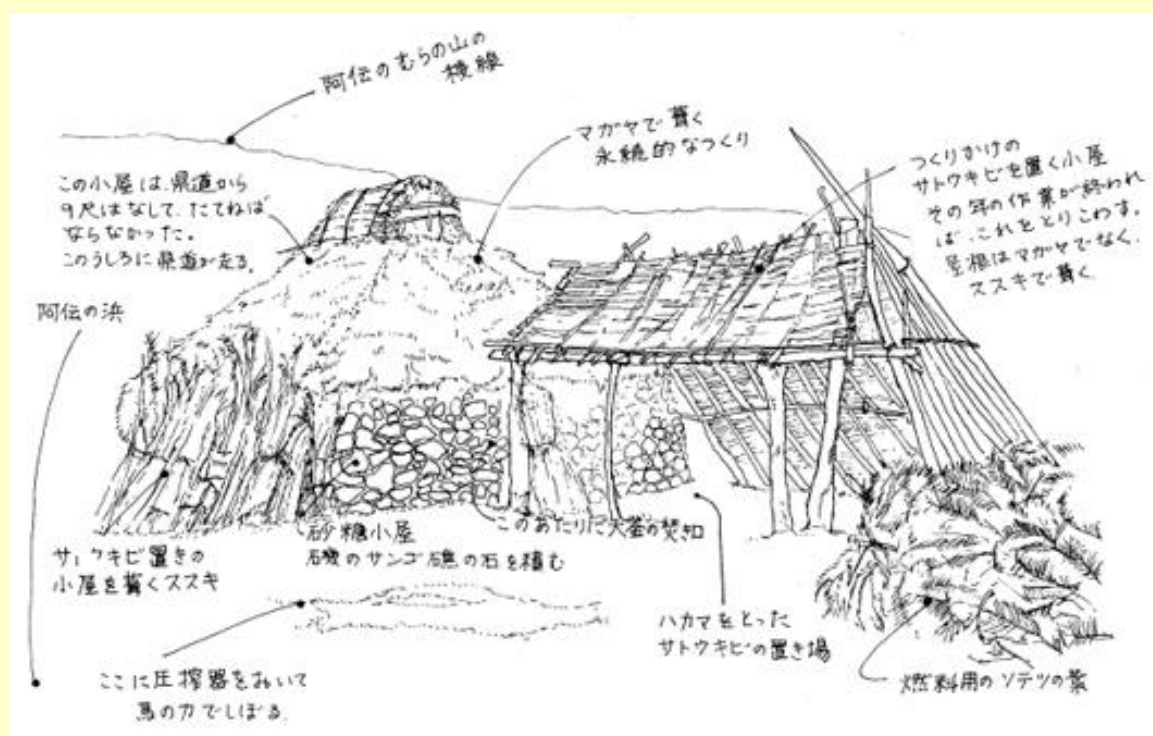
その主要な踏査地をあげると、2003 年鹿児島県、広島県、東京都（新島）、2004 年鹿児島県、2006 年香川県および鹿児島県、海外では 2005 年韓国の江原道、慶尚北道などである。最後の 2 年間の主要な作業は、調査に基づく論考のとりまとめと資料集の刊行に力点を置いた。

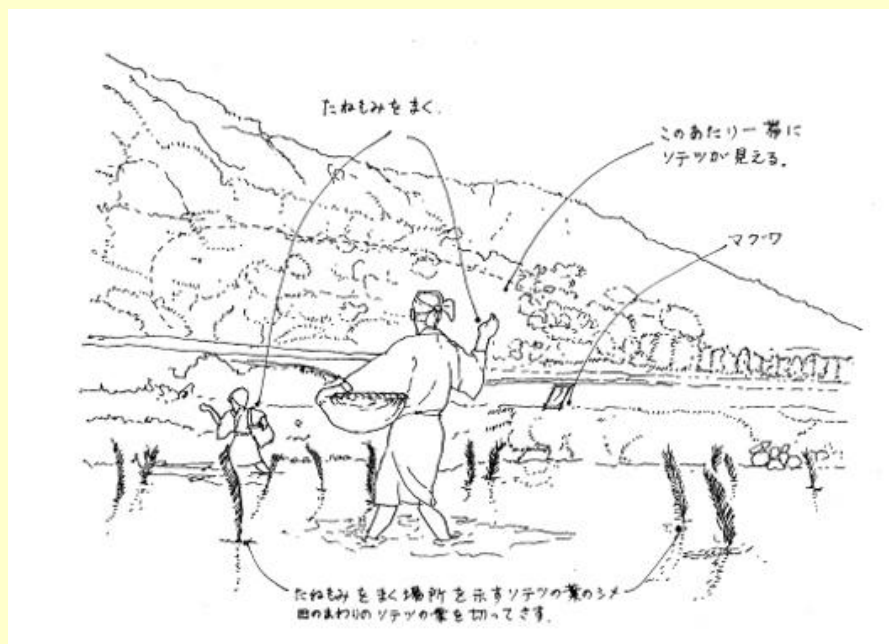
その結果、最終年度には当初刊行を予定していた 2 冊の「湍澤写真」の写真資料集のうち鹿児島県大島郡喜界島町の写真集 1 冊を刊行した。



● 研究成果

喜界島における「湍澤写真」の撮影場所の特定は、聞き取りなどにより一定の成果が得られた。写真を資料として正面に据え、300 点の写真からたとえば「浜」という場、あるいは人々の生活に密着した農耕馬としての「馬」に限定して探求することで、景観の時系列変化の内実を構成する要因とは写真として対象化されたものに限らず、それらを包む外在的要因、すなわち当時喜界島に押し寄せていた社会的変化の表出であることを把握することができた。





研究者（2008 年 3 月 31 日 現在）

課題 1

事業推進担当者

香月 洋一郎

COE 教員

浜田 弘明

共同研究員

鄭 美愛、 富井 正憲、 八久保 厚志

調査研究協力者

李 善愛、高坂 嘉孝

3 班 課題 2 環境認識とその変遷の研究

・ 研究経過

「環境認識とその変遷の研究」の作業班は、当初東日本と西日本の山間のむらの環境認識の変遷についての調査を想定した。

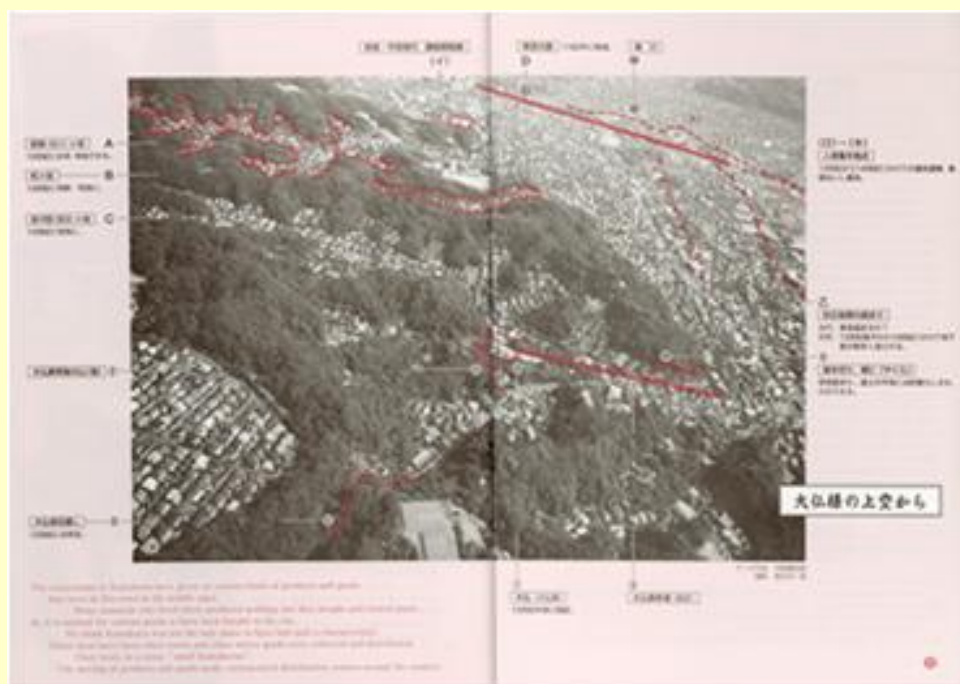
そのために調査研究対象地として、西日本では高知県長岡郡大豊町立川仁尾ヶ内、東日本では長野県上水内郡信濃町赤沢の山のむら、いずれも焼畑や狩猟がかつて大きな比重を占めていたという共通性を持つ地域を選んだ。生活変化のはげしかった高度経済成長期前後の 50 年ほどの生活の移りかわりを基軸にして、口頭伝承を中心に、現在を基点として比較する形で調査をおこない、その結果を報告書にまとめる構想で研究に取り掛かった。

ところが、COE が始まって 2 年目の秋、西日本の調査対象地とした仁尾ヶ内は台風に襲われ、砂防ダムが全壊し、むらは大きな被害を受けた。このため、調査を一時中断せざるを得なかった。結局、むらが多少なりともその被害から立ち直るのに 2 年の時を要した。さらに東日本の場合も調査者の事情により、この調査の中断を余儀なくされた。

後半 2 年の作業では、中世の鎌倉の環境を研究する考古学者との共同作業をおこなった。ただし、この作業も調査担当者の参加が 1 年に限られた。最終年度にいたり、これまでの調査研究で収集した資料や研究成果を基に、今後の研究の進展を図ることとした。

・ 研究成果

「環境認識」とは研究担当者自身の言葉で言い換えれば、人が生活するために環境にどう働きかけ環境を把握してきたかという民俗学の蓄積が活用できる場であると捉え、そのことを海人の日常に密着して調査した事例と焼畑村の生活暦から読み解いた。しかしながら、環境へ働きかける主体の側への視座を同時にあわせ持つものでなければ、環境の変容だけを捉えても主体すなわち人間を含む総体としての環境を把握したことにはならない。この点は今後の課題としておきたい。





研究者（2008年3月31日 現在）

課題 2

事業推進担当者

香月 洋一郎

共同研究員

八久保 厚志

調査研究協力者

田口 洋美

3 班 課題 3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

● 研究経過

課題 3 においては、戦争、占領、災害などで消滅した景観を写真を多用することで復元し、その変容の意味を問うた。研究課題として掲げる景観のみならず、研究素材として用いた写真類それ自体も「非文字」として位置づけられるべきものである。これら素材として用いた写真類が作成された時代は、撮影する主体と対象との間に政治的・社会的緊張関係を孕む 1920 年～30 年であった。したがって、写真に込められた意図や意思をその背景を踏まえて読み解くことがまず必要とされた。海外神社跡地、租界研究班はともに現地調査、聞き取りなどをおこない、戦争による侵略、占領以前の原風景としての景観が、占領後どのような経緯を経て変容したのかその要因を分析した。災害痕跡班はおもに関東大震災の写真絵葉書類を収集し、地図に落とすことを通して、それらが特定の対象に集中すること、さらにはこれら絵葉書写真類が関東大震災に関する人々の震災像をひとつの形に収斂させていくことを検証した。

課題 3 の研究総括においては、人類文化としての非文字資料は、文字資料に対立的に存在するものではなく、文化総体のなかで補完関係にあることが研究成果において実証され、再確認された。また、それぞれのグループが追求する課題に合わせた写真類のデータベース化を図り、公開することにした。

海外神社研究組：海外神社跡地調査を 2003 年度旧樺太南西部（12 社）、2004 年度旧南洋群島（20 社）、2005 年度旧朝鮮（18 社）、2006 年度旧満州満鉄付属地（10 社）をおこなった。 データベース構築のために、海外神社の写真、地図、絵葉書などを収集し、また、実地調査した跡地については実測図を作成して、海外神社「跡地」に関するデータベースの作成をおこなった。

租界研究組：主として中国における旧日本租界に関する現地調査を漢口、上海、天津、青島などでおこない、台湾の国史館、中央研究院、上海市档案馆などで資料の収集を行ってきた。それらの活動の成果を発表すべく、2007 年には「中国における日本租界研究」、「中国進出の日本企業とその建築―戦前の紡績業を事例として」の 2 度のワークショップを開いた。戦前中国の日本租界関連データベースの作成をおこなった。豊臣秀吉の朝鮮出兵時に建造された倭城の性格について、「朝鮮蔚山合戦之図」等の分析をおこなった。

災害痕跡組：幕末から関東大震災に至る 70 年間ほどの期間の災害に関わる絵図、写真を収集し、災害メディアとしての歴史的特徴についての分析をおこない、成果論文を発表した。また、収集資料に基づく 2 件のデータベースを作成した。2005 年度には近世・近代移行期のメディアに関する専門家によるシンポジウム開催、2006 年には「歴史災害と都市」についての立命館大学とのジョイントワークショップ開催、報告書を作成した。2007 年「『名所江戸百景』と江戸地震」データベースをホームページに掲載、2008 年「関東大震災写真・地図と写真のデータベース」を作成した。

海外神社研究組：戦前、アジア・太平洋地域に建てられた約 1600 社の海外神社のうち、105 社の跡地を調査したが、そこから得られた結論の第 1 は、海外神社跡地の景観の変容は（１）「改変」、（２）「放置」、（３）「再建」、（４）「復活」の 4 つの類型に分けることができるということである。

第 2 に、このように異なる景観変容をもたらした要因として、以下の 5 点を析出した。（１）は戦後における日本と海外神社が建てられた当該国家・地域との関係を含む政治的要因である。（２）は日本及び当該国家・地域における社会的変動である。（３）は当該国家・地域における経済的発展の度合いである。（４）は当該国家・地域における文化伝統の問題。そして（５）は当該国家・地域における政治的・宗教的な支配勢力交代の「刻印」という問題である。さらにその上で、以上の 5 つの要因はそれぞれ相互に絡み合い、また増幅、あるいは消去しあいながら、海外神社跡地の多様な景観を形作っているのだということを明らかにした。

租界研究組：戦前に中国の数都市に置かれた日本租界の現況、特に街路、工場やそれに敷設した日本人社宅、中国人労働者住宅の現状について、現地に住む中国人への取材を交えて調査し、加えて建設当時の写真や図面、文字資料を収集分析することで、日本人が住んでいた当時の実態やその後現在にいたるまでの変化を跡付けた。総じて、日本人が住んでいた当時の空間は現地から孤立したものだったが、日本人が去った後には、街路や建物をそのまま利用しつつ現地に溶け込む空間へと変化していったことを明らかにした。

また、朝鮮における倭城が、古来現地にあった邑城とは性格を異にして、侵略拠点の役割を担うものであったことを、合戦図や屏風絵を分析し文字資料で補強することで明らかにした。



㊦ 官幣大社朝鮮神宮の大石段と社号標
（『恩顧 朝鮮神宮御鎮座 10 周年記念』、1937 年 11 月、
朝鮮神宮奉賛会編、72 頁）



災害痕跡組：幕末から明治中期にいたる錦絵、石版画、銅版画、写真とめまぐるしく進展するメディアの技術的發展と社会的受容を跡付ける前半の研究成果と、後半の関東大震災の絵葉書を中心とする研究成果を通じて、メディアの近代化、大衆化の過程をほぼフォローすることができた。近世から近代への転換期のメディア変遷史として位置づけが可能なこれらの時期の特徴は、従来から大衆に親しまれてきた錦絵類と西洋からの技術の導入によって切り開かれたメディアの新領域が相拮抗する状況から新メディアが徐々に大衆化する過程でもある。さらに、災害メディアとしての特徴をあげるならば、貧富の差なく襲う災害では一時的に従来の階層性が消去される瞬間を現出させる。そのため、社会的利害を超えた感覚が蘇生、自他の被害に敏感に反応する状況が生み出され、社会的関心が媒体としての特定のメディアとその情報内容に過度に集中する傾向が強くなることを明らかにした。

研究者（2008 年 3 月 31 日 現在）

課題 3

事業推進担当者

北原 糸子、 大里 浩秋、 孫 安石

共同研究員

金子 隆一、 津田 良樹、 富井 正憲、 三鬼 清一郎

調査研究協力者

上田 純広、 西田 幸夫、 堀内 寛晃

第 4 班 「地域統合情報発信」

4 班 「地域統合情報発信」 総括

第 4 班・地域統合情報発信班は、「文化情報発信の新しい技術の開発」を主題に、1～3 班による非文字資料の体系化作業と共同しながら（1）地域文化情報として統合的に発信するシステム、そして（2）その新技法に習熟した専門学芸員（シニア・キュレーター）養成方法の開発を目指し出発した。（2）は 3 年後、実験展示班として情報発信法としてのあらたな展示論とその人材養成も含め独立したセクションとなった。

研究経過

（1）非文字資料の資料化、データ化、体系化の手順を踏まえての公開化をソフト・ハードの両面から扱う対象地域として、国内では、福島県県只見町において民具・民俗・文書・景観資料を民具使用動作・民具写真・実測図、民俗誌の裏付け、文書資料との整合へと進み、環境景観の変遷・比較（ダム建設以前以後）の作業を通し有機的に関連させ山村の生活構造モデルを時間軸で提示、地域性解明また地域振興のための情報発信の場としての博物館のあり方を提示した。

国外では、中国・雲南省麗江にある東巴文化博物館・東巴文化研究所との協力関係の下に納西族の東巴儀礼・東巴文字・東巴經典の關係性を、身体技法（東巴儀礼）、画像化（象形文字）、文字化（東巴經典）、口承化（神話・年中行事）の諸相から把らえることを考え、初年度は、麗江、只見町において予備調査をおこなった。その結果、地域情報統合発信の場を只見町に決定した。只見町の選定理由は、地域住民の協力はもとより 15 年間におよぶ町史編纂事業が終了し、各種文書類、民具、写真をはじめとした映像資料から地質、動・植物などの自然誌資料までが網羅的に記録化・整理され、それらのおおよその關係性・体系性が 16 巻の町史本編・文化財調査報告書を参照することにより見通すことができ、これらさまざまな地域情報をクロスさせることにより只見町という山村地域の構構性を浮かび上がらせる可能性が高いと考えられたからである。

（2）学芸員養成課程のあり方を中心に、フランス・オーストリア・ドイツ・アメリカの博物館を調査し、地域と大学博物館の連携の必要性などの課題を得た。

3 年度以降は、実験展示班の独立もあり、地域統合情報発信班では、只見町の地域統合情報をインターネット・エコミュージアムというシステムで発信する方法論に焦点を絞った。先述したように当初計画では、他班の研究成果、ノウハウに基づき、一地域である只見町の図像、民具、身体技法、景観のそれぞれの資料を統合的に重ね合わせて何が描けるかがわが班に求められた役割であった。例えば、田植えで実際に使われる民具を近世農書の記載・絵図と対照し、また民俗芸能である早乙女踊の田植えの所作と実際の田植え作業姿勢の異同をモーションキャプチャーの解析で比較する、電源開発や構造改善事業による農地環境の変化が、農法・農具にどのような影響を与えたのかなどいくつかの研究指標をたてたが、他班の成果と關係させて地域情報を統合的に關係付け発信するにはいたらなかった。そこで、只見町の住民自らが整理した約 8,000 点の民具カードのデータベース化を中心に据え、民具に込められた地域情報を最も有効に公開する方法としてインターネット・エコミュージアムというシステムを構想し、その開発を行った。すべての民具を扱うわけにはいかず、画像では屋根葺き職人關係の民具を事例とし、そこに登場する民具の検索からその民具に關係する世界が広がり、地域性の一端がわかるようにした。この間班員は、只見町の折々の生産活動、年中行事の調査をはじめ、古老からの聞き書き等のフィールド調査、民具撮影、民具記録カードのデータベース化、諸資料の映像コンテンツ化などの室内作業に取り組んだ。

この試みは当初の目的からは遥かに遠いが、構想だけは示せたものと考え、また、地域研究と情報工学、文系理系の学問の結合はもとより、大学と地域社会との連携、科学的知識と生活の知恵の総合化という新たな知のイノベーションに結びつく契機となるものと考えている。



研究成果

研究成果として、2003 年度『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』（1 号,2004 年）に 3 名、2004 年度『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』（2 号,2005 年）に 1 名、2005 年度『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』（3 号, 2006 年）に 3 名が、それぞれ研究を発表した。

2006 年度にシンポジウム「民具は世界を結ぶ」を福島県只見町において開催した。また、2007 年度には、第 3 回国際シンポジウムにおいて、「地域研究と情報学の連携 ―インターネット・エコミュージアムの可能性―」を報告した。

4 班の最終報告書として、「地域情報学の構築 ―知のイノベーションへの道―」を刊行した。

研究者（2008 年 3 月 31 日 現在）

事業推進担当者

佐野 賢治、橘川 俊忠、田島 佳也、廣田 律子

共同研究員

木下 宏揚、佐々木 長生、長瀬 一男、中村 政則、能登 正人、八久保 厚志、平井 誠

調査研究協力者

新国 勇、小松 大介、フレデリック・ルシーニュ

第 5 班 「実験展示」

5 班 「実験展示」 総括

第 5 班は、実験展示と高度専門職学芸員養成プログラムの 2 つの課題に取り組んだ。

実験展示は、プログラムの課題である図像・身体技法・環境を展示に統合し、情報発信することを目的として組織された。この 3 者を統合するものとして「あるく」という人類に普遍的な身体技法に焦点を合わせることにした。テーマ設定、資料収集、展示企画、実施の過程を踏まえ、2007 年 11 月 1 ヶ月間展示公開をおこなった。

高度専門職学芸員養成プログラムは、まず第一に研究者としての能力を持ち、同時に博物館についての学芸員としての見識と技能をもつことが要求される。この資質を磨き、また博物館についての体系的な知識と見識、能力をもつ専門職の養成のために必要なプログラムの考案が必要である。これらを実現するために、歴史民俗系の大学院専攻課程における高度専門職学芸員養成のプログラムを策定し、また博物館学大学院設置へのカリキュラムの提案をおこなった。

5 班

- 高度専門職学芸員養成プログラム
- 実験展示



研究者(2008 年 3 月 31 日 現在)

事業推進担当者

河野 通明、福田 アジオ、田上 繁

COE 教員

中村 ひろ子、青木 俊也、浜田 弘明

共同研究員

榎 美香、刈田 均

高度専門職学芸員養成プログラム

研究経過

大学院における高度専門職学芸員の養成について検討した。

まず学芸員養成の現状を把握するために、このカリキュラムをもつ大学院への調査をおこない、文科省、学術会議、博物館学会、さらには日本博物館協会などで蓄積されている学芸員養成に関わる情報を収集し、その動向について分析を進めた。

近年学芸員の高度化、専門化の必要性についての指摘はあるものの、専門性そのものの論議の深まりがみられない。それは、関連領域の問題が広く介在し、1つの結論に達することが困難なことを示している。そこで博物館学の研究者、学芸員の養成に関わる教員、現場の学芸員といったそれぞれの視点からの論議を交わすために、「学芸員の専門性をめぐって」と題する公開研究会を開催し論議を深めた。

研究成果

『高度専門職学芸員を養成するー養成カリキュラムの検討報告書』において、以下の提言をおこなった。

第1の提案は現行の歴史民俗系の研究科を例に、高度専門職学芸員養成を図るためにはどのようなプログラムを新たに追加すべきかという点である。現在修士課程修了の学芸員が増えつつあるにも拘わらず、大学院においては歴史学、民俗学などの研究領域の専門性を高めるのみで学芸員の専門性を高めるためのプログラムが用意されていない。この現状を踏まえ、実現性の高い具体的なカリキュラムを提示した。

第2は博物館学大学院新設の提案である。高度専門職学芸員養成には必要なカリキュラムを担う研究者の育成が不可欠であり、いまだ博物館学研究科を設置するところのない現状への問題提起を行った。そして、学芸員養成大学院新設の提案をする必要性を強調した。今回は具体的なカリキュラムの提示はしていないが、いずれ検討すべきことが予測される課題である。

現在、文科省では上級学芸員といった新たな高度専門職としての資格の制度化を検討中であり、いずれそれへの対応を含めたカリキュラムの再検討を要するが、現状に即した提言の素材となるよう、大学院における現状についての報告と学芸員の専門性を問うた研究会の記録を収めた。

実験展示

研究経過

非文字資料研究の成果発信として従来試みられることの少なかった展示という手法を選択したことの意味を問いながら、会議を重ね展示構想の策定を進めた。非文字資料のひとつである「身体技法」という具体的なテーマを設定したうえで、この展示が研究者という枠を超えた人々に、非文字資料の存在とそれが切り拓く可能性について論議を深め、それらを直接発信する装置の有効性を検討した。各自それぞれ企画案を提示・検討し、テーマを身体技法の中でも最も基本的な「あるく」に絞り、「あるく ―身体の記憶―」の展示構想を固めた。

この展示は、観覧者がそれぞれの身体の記憶を意識化する場として用意した。展示資料は図像資料を中心とすることで、「非文字資料を用いた展示」という新たな挑戦を試みた。

また、展示に本学の学生をはじめ市民や研究者など外部の多様な人々の参加を得ることができた。さらには観覧者の展示評価を展示にフィードバックするという仕組みを通して、観覧者の展示への参画の筋道を設けた。この展示では文字情報をできるかぎり排し、参加型展示、触る展示といった展示手法を試みることにした。

研究成果

実験展示「あるく ―身体の記憶―」を2007年11月1日から30日までの1ヶ月間学内の常民参考室において実施した。

展示場には、横浜市内、神奈川区内といった地域の人々や本学の学生など、研究者の枠を超えたさまざまな人々が観覧者として足を運んだ。展示を見る人々との交信のありようがひとつの研究成果ともなりえた。

この展示で発信したのは、図像資料を通してたどり着いた「かつての私たちの歩き方」に「世代を超えて私たちの身体に伝えられたもの」がみえるかどうかの問いかけであった。新しい試みは、観覧者がさまざまな歩き方の実演を含んだ映像プログラムに沿って実際に歩くことにより、自らの身体を使って発信者からの問いかけを検証するものであった。それと同時に第三者による展示評価によって、新しい試みの成果を検証した。このような方法により、展示への同意や異議を踏まえて、展示を見直し再発信することをおこなった。この点は刊行物などによる一方向からの発信とは異なり、展示が相互確認の場となりえたのである。

それはまた、この展示が「あるく」研究の実験、検証の場となりえたことを示しており、そこに「身体技法」、さらには「非文字資料」研究の方法の問い直しを含め、今後への新たな視点をもたらすことへの可能性を確認した。

展示の記録保存を『実験展示「あるく―身体の記憶をつくる」』の刊行と映像による記録（DVD）により進めた。研究成果の発信である以上展示終了後も検証を可能にしておくことは欠かせないが、展示は発信装置としてだけでなく、展示そのものがつくる過程も含め研究成果として蓄積され発信されるべきとの提言を込めた。

6 班 「理論総括研究」

6 班 「理論総括研究」 総括

研究経過



理論総括班の課題は、非文字資料とは何かを考察し、非文字資料研究の方法を整序し、非文字資料の体系化への筋道をつけ、さらにそれが人類文化の研究にとってどういう意味があるかを明らかにすることにある。非文字資料のように、これまで自覚的かつ意識的に取り上げられることが少なかった資料を対象とする研究の場合、なによりも個々の非文字資料に即した個別的研究の蓄積を前提にしてはじめてそのような課題への取り組みが可能になる。もちろん、少ないとはいえこれまでなされてきた研究の成果を検討することや抽象的レベルでの考察も必要であろう。理論総括班は、本プログラムにおいて推進されてきた個々の非文字資料の研究状況を検討しつつ、そうした作業もおこなってきた。



しかし、理論総括班としては、あくまで自分達の経験、研究成果に依拠しつつ、その一般化を中心的課題として自らに課してきた。したがって、本班は、各班、各課題の動向に注目し、適宜各班・課題からの報告を受け、それを素材として考察を進めるという方向を選択した。また、各個別研究班・課題が、自らの経験を理論的に整序し、問題提起することを進めてきた。



実際には、各年度の全体研究会における各班からの報告を受け、全体的研究状況の把握に努め、国際シンポジウムなどへも積極的に参加し、理論的に考察を加えるべき素材を収集してきた。さらに、4年目からは、個別テーマの研究の進捗を前提として、各班の代表者による報告を中心とした研究会を開催し、個別資料の研究から生じた問題点を整理し、「非文字資料の体系化」という困難な理論的課題に取り組んできた。

研究成果



本班の研究成果は、すでに国際シンポジウムあるいは全体研究会の報告・コメントなどの形で発表してきたが、最終的には、論集『非文字資料研究の理論的諸問題』としてまとめた。



本論集に収載した3つの論文は、少数とはいえ、そうした活動の成果である。まず、非文字資料の認識論的基礎を哲学史あるいは認識論的観点から論じ、非文字資料の研究成果が人類の知的財産として認知されるために不可欠の課題に挑んだ論文、つぎにそれへの批判の形をとって自らの研究の経験を普遍化し、非文字資料研究の具体的進展に資するために執筆された論文、さらに、本プログラムの全体状況を鳥瞰しながら、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトルに掲げられた課題への理論的諸問題を整理し、さらなる理論形成へ展望を開く試論が展開された。

「ミネルバの梟は夕暮れに飛び立つ」ということわざがあるように、体系的理論の形成は、その領域の研究がある程度完成に近づいたときにのみ達成される課題であるとすれば、非文字資料の本格的な体系的研究は、本プログラムにおいてはじめて取り組まれた課題であり、完成に近づいたとは到底いえないが、今後の課題や方向性を提示することができた。

研究者（2008年3月31日 現在）

事業推進担当者

的場 昭弘、香月 洋一郎、橘川 俊忠、齊藤 隆弘、鈴木 陽一、福田 アジオ

共同研究員

能登 正人

非文字資料データベース

非文字資料データベース

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムにおいては、情報発信を最重要課題の 1 つと考え、以下の 9 件のデータベースを作成、それぞれ情報発信をおこなった。

対象とするデータにより、発信のスタイルはデータにふさわしい形を取るが、おおむねつぎのような分類となる。まず、わたしたち COE 独自の研究成果である「生活絵引」、すなわち描かれた生活の細部に関する情報辞典ともいうべきものは『朝鮮風俗画』絵引データベース、および『東海道名所図会』絵引データベースの 2 件、福島県只見町の現在版生活絵引きともいうべき『神奈川大学 COE 只見町インターネット・エコミュージアム』、さらには日本侵略時代の海外の過去と今を対象させつつ写真調査資料をデータ化した海外調査『海外神社（跡地）調査データベース』、『租界とアジアデータベース』の 2 件、安政大地震の被害と復興を史料で読み解く『「名所江戸百景」と江戸地震データベース』、関東大震災の絵葉書写真から震災像を捉える試みの『関東大震災・地図と写真のデータベース』、それにもっともオーソドックスで基本的な検索機能を生かした文献書誌データの検索を目的とした『図像文献書誌情報データベース』および『図像文献目録データベース』の 9 件である。

- ・ 図像文献書誌情報データベース
- ・ 図像研究文献目録データベース
- ・ 「名所江戸百景」と江戸地震データベース
- ・ 『東海道名所図会』絵引データベース
- ・ 『朝鮮風俗画』絵引データベース
- ・ 海外神社（跡地）調査データベース
- ・ 租界とアジアデータベース
- ・ 関東大震災・地図と写真データベース
- ・ 神奈川大学 COE 只見町インターネット・エコミュージアム

刊行物

刊行物

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムでは、研究経過途上、あるいは成果などを刊行物として出版することに力点を置いた。これは人文系研究が現状ではインターネットを利用した研究よりも印刷物を読み、思考するという研究スタイルに依然として軸足が置かれていることを考慮したためである。

その結果、成果報告は以下のような研究成果報告、年報、シンポジウム・ワークショップ報告書、調査研究資料、ニューズレター、助成刊行物、の 6 種 47 冊におよんだ。

研究成果報告書

研究成果報告書は、『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』本文編および語彙編各 2 冊、『日本近世・生活絵引』北海道編、北陸編、東海道編の 3 冊、『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編の 2 冊、各班の課題の成果報告書『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』、『「景観」と「環境」についての覚書』、『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』、『地域情報学の構築 ―新しい知のイノベーションへの道―』、『高度専門職学芸員の養成 ―大学院における養成プログラムの提言―』、実験展示『「あるく ―身体記憶―」をつくる』、『非文字資料研究の理論的諸問題』、『研究事業総括報告書』の 8 冊、および『非文字資料から人類文化へ ―研究参画者論文集―』『非文字資料研究の可能性 ―若手研究者研究成果論文集―』の 2 冊である。

年報

年報類は『人類文化研究のための非文字資料の体系化』1～4 号の 4 冊である。

シンポジウム・ワークショップ報告書

国際シンポジウムを 2005 年度～2007 年度の 3 ヶ年にわたり 3 回開催した。それらに付随して、プレシンポジウム、あるいは他大学と連携したシンポジウムを開催し、その成果を報告書にまとめた。

第 1 回国際シンポジウム プレシンポジウム報告書『版画と写真 ―19 世紀後半 出来事とイメージの創出―』、第 1 回国際シンポジウム報告書『非文字資料とはなにか ―人類文化の記憶と記録―』、第 1 班「図像資料の体系化と情報発信」公開研究会『図像から読み解く東アジアの生活文化』、第 2 回国際シンポジウム報告書『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』、立命館大学とのジョイントワークショップ報告書『歴史災害と都市 ―京都・東京を中心に―』の 5 冊である。

調査研究資料

『環境と景観の資料化と体系化にむけて』、『図像文献書誌情報目録』、『図像研究文献目録』、『手段としての写真 ―「澁澤写真」の追跡調査を中心に―』『「澁澤写真」に見る 1935～1936 の喜界島』の計 5 冊である。

ニュースレター

『非文字資料研究』1～18 号を季刊刊行物として発行した。19 号は 2008 年 3 月発行である。

助成刊行物

『対話する歴史と民俗 ―歴史民俗資料学のエチュード―』、鈴木江津子著『室町幕府 足利義教「御前沙汰」の研究』（歴史民俗資料学叢書 1）、半澤健市著『財界人の戦争認識 ―村田省蔵の大東亜戦争―』（歴史民俗資料学叢書 2）、王京著『1930、40 年代の日本民俗学と中国』（歴史民俗資料学叢書 3）の 4 冊である。



全体研究活動報告

シンポジウム

ワークショップ

実検展示

全体研究会

全体研究活動報告



通常の研究活動は6班で編成した研究班「図像資料の体系化と情報発信」(1班)、「身体技法および感性の資料化と体系化」(2班)、「環境と景観の資料化と体系化」(3班)、「地域統合情報発信」(4班)、「実験展示」(5班)、「理論総括研究」(6班)でおこなっています。

また、班の研究活動とは別に、全体の研究活動、本プログラムに関連した研究活動も同時におこなっています。



シンポジウム

第3回国際シンポジウム

第1回国際シンポジウムは「非文字資料とは何か」というテーマで開かれ、第2回国際シンポジウムは「非文字資料を読み解く」というテーマで開かれ、それぞれ多くの収穫があった。第3回国際シンポジウムは、これまで2回の国際シンポジウムを承け、研究成果を踏まえた新たな情報発信の試みを公開提示するとともに、本プログラムの活動全体を総括するイベントになるよう企画している。このシンポジウムでは、今まで取り組んできた「非文字資料」研究の成果のなかから、とくに地域研究と身体技法にかかわる成果を、新たに開発したシステムにより情報発信することを試みる。1日目の報告内容は、地域という「場」に人類活動の記憶を見出すための情報発信であり、2日目の報告内容は、身体技法という人間の「からだ」に刻印された人類文化の記憶を読みとるための情報発信である。各研究グループの成果を統合・体系化して、ひろく社会に発信する方法を開示したい。また2日目の午後には、総合討論の時間を設け、本プログラム全体について総括をおこなうことを予定している。この領域に関心を持つ内外の多くの方々参加を得て、第3回 COE 国際シンポジウムが「非文字資料」研究の新たな地平を切り開いたしかな一里塚となり、最終年度にふさわしい催しになることを願っている。

テーマ	場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平
開催日	2008年2月23日（土）・24日（日）
会 場	横浜キャンパス 16号館 セレストホール
趣 旨	「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という壮大な課題を掲げた神奈川大学 21世紀 COE プログラムは、本年度をもっていったん終了する。図像・民具・景観などの分野にかかわる「非文字資料」研究を積み重ねてきたが、その成果を統合・体系化してひろく社会に還元することが課題として残されている。
詳 細	<u>ポスター</u> 、 <u>リーフレット</u>

第1日目 2月23日(土)

プログラム

＜総合司会＞西 和夫(神奈川大学教授、COE サブリーダー)

10:00～10:05 開会挨拶

- ・中島 三千男(神奈川大学長)

10:05～10:20 主催者挨拶

- ・福田 アジオ(神奈川大学教授・COE 拠点リーダー)

10:20～11:40 セッション1「マルチ言語版『日本常民生活絵引』の編纂刊行」

【コーディネーター】

- ・前田 禎彦(神奈川大学准教授・COE 事業推進担当者)

【パネリスト】

- ・前田 禎彦(神奈川大学准教授・COE 事業推進担当者)「オリジナル版『生活絵引』の編纂とその意義
- ・君康道(東京大学大学院総合文化研究科講師・COE 共同研究員)「マルチ言語版『生活絵引』の編纂とその意義

【コメンテーター】

- ・韓 東洙(韓国、漢陽大学校建築大学教授)
- ・クリスティーナ・ラフィン(カナダ、プリティッシュコロンビア大学助教授)

12:50～14:40 セッション2「租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み」

【コーディネーター】

- ・大里 浩秋(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)

【パネリスト】

- ・富井 正憲(神奈川大学助教・COE 共同研究員)「旧在華企業の居住環境—公大紡績住宅を中心に」
- ・孫 安石(神奈川大学准教授・COE 事業推進担当者)「漢口日本租界と日本人—菊地洋氏の資料を中心に」
- ・津田 良樹(神奈川大学助手・COE 共同研究員)「旧満州における神社のありよう」
- ・三鬼 清一郎(元神奈川大学教授・COE 共同研究員)「倭城と近世城郭」

【コメンテーター】

- ・李 百浩(中国、武漢理工大学教授・武漢理工大学土木工程与建築学院院长)
- ・蔡 錦堂(台湾、国立台湾師範大学副教授・台湾史研究所所長)

14:55～16:55 セッション3「インターネット・エコミュージアムの可能性 —地域研究と情報学の連携—」

【コーディネーター】

- ・佐野 賢治(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)

＜事例報告＞

小野 博(コンテンツ(株))「福島県只見町におけるインターネット・エコミュージアム」

【パネリスト】

- ・佐野 賢治(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)「非文字資料と地域社会 —地域統合情報発信システムとしてのインターネット・エコミュージアム—」
- ・木下 宏揚(神奈川大学教授・COE 共同研究員)「地域情報の統合化 —民具データを事例にして—」

- ・朽木 量（千葉商科大学准教授）「地域を博物館（ミュージアム）にすること ―記憶という地域文化資産―」
- ・柴山 守（京都大学東南アジア研究所副所長）「地域情報学の創出 ―ハノイ都市形成研究を事例にして―」

【コメンテーター】

- ・尹 紹亭（雲南大学教授）「中国文化生態村の構想と実際から」
- ・任 章赫（韓国・韓国中央大学校副教授、文化財庁文化専門委員）「韓国民俗村の実績と可能性から」

16：55～17：35 質疑応答

17：35～17：40 閉会挨拶

第2日目 2月24日（日）

＜総合司会＞田上 繁（神奈川大学教授、COE 事務局長）

10：00～11：30 セッション4「身体技法及び感性の資料化と体系化」

【コーディネーター】

- ・廣田 律子（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・川田 順造（元神奈川大学教授・COE 共同研究員）「身体技法及び感性の体系的資料化にむけて」
- ・廣田 律子（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）
- ・海賀 孝明（（株）わらび座チーフエンジニア）「モーションキャプチャ技術と身体技法」
- ・渡部 信一（東北大学教授）「民俗芸能の『わざ』はデジタルで伝わるのか？」

【コメンテーター】

- ・アルベール・ピアンヴニユ・アコハ（アフリカ、アボメニカラヴィ大学教授）
- ・中村 美奈子（お茶の水女子大学准教授）
- ・小島 一成（神奈川工科大学准教授）

13：00～14：10 セッション5「身体技法を展示する」

【コーディネーター】

- ・中村 ひろ子（神奈川大学 COE 教員）

【パネリスト】

- ・中村 ひろ子（神奈川大学 COE 教員）「展示をつくる 1 ―研究成果発信装置としての可能性―」
- ・青木 俊也（松戸市立博物館学芸員・神奈川大学 COE 教員）「展示をつくる 2 ―研究成果発信装置としての可能性―」

【コメンテーター】

- ・笹原 亮二（国立民族学博物館准教授）
- ・村井 良子（（有）プランニング・ラボ代表取締役）

14：20～15：20 質疑応答

15：40～17：40 総合討論

前半 国際シンポジウムのまとめ

＜司会＞佐野 賢治

後半 COE プログラム全体についてのまとめ

＜司会＞橘川 俊忠（神奈川大学教授・COE サブリーダー）

17：40～17：45 閉会挨拶

第2回 COE 国際シンポジウム

テーマ	図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く
開催日	2006 年 10 月 28 日（土）・29 日（日）
会 場	横浜キャンパス 16 号館 セレストホール

第1日目 10月28日（土）

プログラム

10:00～10:05 開会挨拶

・山火 正則（神奈川大学長）

10:05～10:20 主催者挨拶

・福田 アジオ（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 拠点リーダー）

10:20～12:00 セッション1「非文字資料をめぐる方法論的諸問題」

【コーディネーター】

・的場 昭弘（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・アラン＝マルク・リュ（フランス、リヨン第3大学教授）「デジタル人類学・マルチメディア環境のためのデジタル資料」
- ・的場 昭弘（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）「非文字資料はいかに認識されるかー 知覚をめぐる哲学的諸問題ー」

【コメンテーター・司会】

・橘川 俊忠（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）

13:30～15:30 セッション2「図像のなかの暮らしと文化ー日本と東アジアの近世」前半

【コーディネーター】

・金 貞我（神奈川大学 COE 教員）

【パネリスト】

- ・福田 アジオ（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 拠点リーダー）「生活絵引編さんの世界的意義」
- ・田島 佳也（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）「近世生活絵引の作成に向けての試みー『農業図絵』を題材にしてー」
- ・王 正華（台湾、中央研究院近代史研究所研究員）「17・18 世紀中国における都市図、都市文化と風俗画の興隆」
- ・金 貞我（神奈川大学 COE 教員）「韓国・朝鮮編絵引編纂と図像資料ー「平壤監司饗宴図」を例にして」

【司会】

・西 和夫（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）

16:00～16:55 セッション2「図像のなかの暮らしと文化ー日本と東アジアの近世」後半

【コーディネーター】

- ・金 貞我（神奈川大学 COE 教員）

【コメンテーター】

- ・ジョシュア・モストー（カナダ、ブリティッシュコロンビア大学教授）
- ・メラニー・トレーデ（ドイツ、ハイデルベルグ大学教授）

転載【司会】

- ・西 和夫（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）

16：55～17：00 閉会挨拶

第2日目 10月29日（日）

10：00～12：00 セッション3「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」

【コーディネーター・司会】

- ・河野 通明（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・渡部 武（東海大学教授）「中国の伝統犁とその技術移転」
- ・金 光彦（韓国、仁荷大学校名誉教授）「韓国犁の形態と地域的特徴」
- ・河野 通明（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）「日本犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」

【コメンテーター】

- ・尹 紹 亭（中国、雲南大学教授）

13：30～15：30 セッション4「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」

【コーディネーター・司会】

- ・八久保 厚志（神奈川大学助教授・神奈川大学 COE 共同研究員）

【パネリスト】

- ・藤永 豪（佐賀大学講師・元神奈川大学 COE 研究員（PD））「景観分析における資料としての写真の可能性」
- ・浜田 弘明（桜美林大学助教授、神奈川大学 COE 教員）「景観研究資料としての『渋沢フィルム』の今日的意味 ―韓国南部を例に―」

【コメンテーター】

- ・鄭 美（平成国際大学非常勤講師奥野 志偉（神戸流通科学大学、教授）

15：45～17：25 総合討論

【司会】

- ・北原 糸子（神奈川大学非常勤講師・神奈川大学 COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・的場 昭弘（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）
- ・金 貞我（神奈川大学 COE 教員）
- ・河野 通明（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 事業推進担当者）
- ・八久保 厚志（神奈川大学助教授・神奈川大学 COE 共同研究員）

17：25～17：30 閉会挨拶

第1回 COE 国際シンポジウム

テーマ	非文字資料とはなにか ー人類文化の記憶と記録ー
開催日	2005 年 11 月 26 日（土）・27（日）
会 場	横浜キャンパス 16 号館 セレストホール

第1日目 11月26日（土）

プログラム

10:00～10:05 開会挨拶

- ・山火 正則（神奈川大学長）

10:05～10:20 主催者挨拶

- ・福田 アジオ（神奈川大学教授・COE 拠点リーダー）

10:00～12:00 基調講演「非文字資料から見る人類文化」

- ・川田順造（神奈川大学教授・COE 拠点サブリーダー）

10:00～12:00 セッション1「記号と写真 ー19世紀後半メディアがもたらした衝撃ー」

【コーディネーター】

- ・北原 糸子（神奈川大学非常勤講師・COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・原信田 寛（国際浮世絵学会会員、2003 年度 COE 共同研究員「見えない都市ー出来事を語る江戸の錦絵」
- ・セバスチャン・ドブソン（イギリス・写真歴史家）「写真による日本に対してのまなざしの形成」
- ・コンスタンチン・グーバー（ロシア・ロシア海軍博物館チーフアーチスト）「航海と発明の先達アレキサンダー・モジャイスキーが残した芸術と科学の遺産」

【コメンテーター】

- ・渡辺 俊夫（イギリス、ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授）
- ・金子 隆一（東京都写真美術館学芸課専門調査員・COE 共同研究員）

15:00～16:45 セッション2「身体技法と祭祀芸能 ー祭祀者の動きと人形の動きからー」

【コーディネーター】

- ・廣田 律子（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・張 勁 松（中国、湖南省民間文芸家協会副主席）「中国瑶族の祭祀者の身体技法」
- ・田 耕 旭（韓国、高麗大学民俗学研究所所長）「韓国の祭祀芸能における身体技法」
- ・大谷津 早苗（昭和女子大学助教授）「人形から見る身体技法」

【コメンテーター】

- ・康 保成（中国、中山大学教授）
- ・山口 建治（神奈川大学教授、COE 事業推進担当者）

第2日目 11月27日（日）

10:00～12:00 セッション3「民具と民俗技術」

【コーディネーター】

- ・河野 通明（神奈川大学教授、COE 事業推進担当者）

【パネリスト】

- ・周 星（愛知大学教授）「中国民俗学は日本の民具研究から何を学ぶべきか」
- ・尹 紹亭（中国、雲南大学教授・人類学博物館館長）「中国木製犁の形態と分布」
- ・高 光敏（韓国、済州大学校博物館学芸研究員）「排泄の民俗と民具－済州島・韓半島・舟山島の比較」

【コメンテーター】

- ・近藤 雅樹（国立民族学博物館教授）
- ・安室 知（国立歴史民俗博物館助教授）

13：00～14：45 セッション4「非文字資料の情報化と教育」

【コーディネーター・司会】

- ・的場 昭弘（神奈川大学教授・神奈川大学 COE 共同研究員）

【パネリスト】

- ・白 庚 勝（中国、民間文芸協会副主席）「中国における文化遺産の保護について」
- ・ジュヌヴィエーヴ ガロ（フランス、パリ国立文化遺産研究所校長）「フランスにおける文化遺産の保護について」
- ・能登 正人（神奈川大学助教授・COE 共同研究員）「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」

【コメンテーター】

- ・アラン・マルク・リュ（フランス、リヨン大学教授）
- ・橘川 俊忠（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

15：00～16：45 総合討論

【コーディネーター】

- ・佐野 賢治（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

【各セッションの報告】

セッション1 コーディネイター：北原 糸子（神奈川大学非常勤講師・COE 事業推進担当者）

セッション2 コーディネイター：廣田 律子（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

セッション3 コーディネイター：河野 通明（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

セッション4 コーディネイター：的場 昭弘（神奈川大学教授・COE 共同研究員）

討論

まとめ

16：45～17：00 閉会挨拶

同時開催 企画展示

「浮世絵における常識と非常識 ー復刻版でみる『名所江戸百景』ー」

日時	2005年11月18日（金）～30日（水）12：00～16：30 *23日（水・祝）休み *20日（日）・26日（土）、27日（日）のみ10：00～18：00
----	---

ワークショップ

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム若手研究者ワークショップ

テーマ	手段としての「非文字」ー資料と方法のあいだ
開催日	2008 年 1 月 26 日(土)10:30~18:00(受付開始:10:00)
会 場	神奈川大学 16 号館視聴覚ホール B(収容人数 100 名、事前申込不要)
趣 旨	神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に関わった若手研究者 (PD、RA)を中心に、それぞれの具体的な研究の「現場」から、「非文字」の方法としての可能性、およびそれを資料化するプロセスについて考え、議論しあうことによって学問の共有財産にしていく試みである。
詳 細	ポスター 、 リーフレット

1 月 26 日 (土)

プログラム 10 : 30 ~ 10 : 35

開催のことば

- ・ 山口 建治 (事業推進担当者、ワークショップ実行委員会委員長)

10 : 35 ~ 10 : 45 ワークショップの経緯、趣旨と構成

- ・ 王 京 (PD、司会、同実行委員会委員)

セッション 1 : 絵画を読み解く

10:45 ~ 11:20

- ・ 彭 偉 文 (RA) 「記録手段としての絵画ー「姑蘇繁華図」に描かれた女性を例として」

11 : 20 ~ 11 : 55

- ・ 佐々木 弘美 (RA) 「絵画の構図をよむー一遍聖絵の場合」

セッション 2 : フィールドで考える

12 : 50 ~ 13 : 25

- ・ 土田 拓 (RA) 「調査写真の性格と用法ー景観の中のコンクリートブロック」

13 : 25 ~ 14 : 00

- ・ 樫村 賢二 (元 RA) 「非文字と言語ー北京大学生の言語イメージを通して」

セッション 3 : 博物館から展望する

14 : 50 ~ 15 : 25

- ・大西 万知子（元 RA）「感性を展示することー英国と日本の事例から」

15：25～16：00

- ・丸山 泰明（元 PD）「21 世紀における博物館の可能性ー北欧で考えた二、三のこと」

16：15～16：45 コメント

- ・香月 洋一郎（事業推進担当者）
- ・北原 糸子（事業推進担当者）
- ・青木 俊也（COE 教員、松戸市立博物館学芸員）

16：45～18：00 総合討論

18：00 閉会のことば

- ・土田 拓（RA、同実行委員会委員）

立命館大学・神奈川大学 21 世紀 COE プログラムジョイントワークショップ

テーマ	歴史災害と都市 ー京都・東京を中心にー
開催日	2006 年 8 月 26 日（土）・27 日（日）
会 場	みなとみらい クイーンズタワーA 5 階会議室
共 催	立命館大学 21 世紀 COE プログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」

第 1 日目 8 月 26 日（土）

プログラム

13：00～17：00 1 部 都市の歴史と災害復元

- 「平安京の地形環境と災害」河角 龍典（立命館大学）
- 「平安京の祭礼と災害」片平 博文（立命館大学）
- 「公家町の火災と防災」冷泉 為人（財・冷泉家時雨亭文庫）
- 「近世京都の火災と復興」鈴木 栄樹（京都薬科大学）
- 「3 次元でみる京都の景観と災害」中谷 友樹（立命館大学）

第 2 日目 8 月 27 日（日）

10：00～11：30 2 部 関東大震災と社会

- 「関東大震災の写真と地図のデータベース」諸井 隆文（鹿島建設）、北原糸子（神奈川大学）
- 「関東大震災の救済」鈴木 淳（東京大学）
- 「関東大震災後の社会」佐藤 健二（東京大学）

13：00～14：30 3 部 歴史災害と現代

「絵画を活用した防災—三河地震を素材として」林 能成（名古屋大学）、木村 玲欧（名古屋大学）
「文化財と災害痕跡」林 雄三（文化庁）
「日常生活のなかの災害認識」香月 洋一郎（神奈川大学）
14：40～16：40 4部 討論

第 1 班「図像資料の体系化と情報発信」公開研究会

テーマ	図像から読む解く東アジアの生活文化
開催日	2005 年 12 月 10 日(土)13:00～17:00
会 場	神奈川大学横浜キャンパス 16 号館 第 2 会議室

プログラム

挨拶

- ・福田 アジオ（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム拠点リーダー）

司会

- ・鈴木 陽一（神奈川大学大学院外国語学研究科教授）

通訳

中国語：彭 偉 文（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究員 RA）

中国語：王 京（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究員 RA）

韓国語：林 淑 姫（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

（1）載立強（中国・遼寧省博物館研究員）

「清明上河図」と「姑蘇繁華図」

（2）馬漢民（中国・中国俗文学学会常務理事副秘書長）

「蘇州の生活と民俗」

（3）張長植（韓国・国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官）

「朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相

金貞我（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム共同研究員）

「都市図における風俗表現の機能」

第 1 回国際シンポジウムプレシンポジウム

テーマ	版画と写真 19 世紀後半—出来事とイメージの創出
開催日	2005 年 11 月 20 日（日）
会 場	神奈川大学横浜キャンパス 16 号館 セレストホール

プログラム

10：30～10：35 開会の辞

10：35～10：40 挨拶

・中島 三千男（神奈川大学副学長）

10：40～12：00

・木下 直之（東京大学教授）「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」

13：00～13：55

・原信田 實（国際浮世絵学会会員、2003 年度 COE 共同研究員）「浮世絵は出来事をどのようにとらえてきたか」

13：55～14：20

・鈴木 廣之（東京学芸大学教授、2005 年度 COE 共同研究員）「変貌する明治の図録」

14：20～14：45

・増野 恵子（早稲田大学非常勤講師、2004 年度 COE 共同研究員）「見える民族・見えない民族 —『興地誌略』の世界観

14：45～15：10

・金子 隆一（東京都写真美術館学芸課専門調査員、COE 共同研究員）内田九一の「西国・九州巡幸写真」の位置

「祓いと儀礼と技法」

日時	2005 年 7 月 23 日（土） 13:30～16:00
場所	神奈川大学横浜キャンパス 17 号館 215 室
司会	顧 希佳（杭州師範学院 教授） 「呉越神歌の文化史意義 —祓いの儀礼からみた—」
	アレクサンドル・グラ（立命館大学 専任講師）

	「追儺儀礼における方相氏の役割の変化」
コメンテーター	廣田 律子（神奈川大学 教授）
企画・主催	外国語学研究科中国言語文化専攻

「歴史研究における図像資料のデジタル化」

日時	2005 年 4 月 28 日（木） 15:00～18:00
場所	神奈川大学横浜キャンパス 21 号館共同研究室
司会	大里 浩秋（神奈川大学）
	柴山 守（京都大学東南アジア研究所） 「情報技術と歴史・文化研究－空間情報としてみる非文字資料」
	小野 博（コンテンツ株式会社） 「非文字資料の大規模デジタルアーカイブと先端技術」
	貴志 俊彦（島根県立大学） 「近代東アジアの文字／非文字資料のデジタル化と公開利用」
	孫 安石（神奈川大学） 「戦争と画報－「支那事変」関連の画報と租界」
主催	外国語学研究科中国言語文化専攻、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」
共催	神奈川大学 人文学会

実験展示

第5班実験展示班は、テーマ「あるく ―身体の記憶―」を2007年11月1日(木)～30日(金)、2008年2月23日(土)・24日(日)、神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室において実施した。期間中の観覧者は700名におよび、成功裏のうちに幕を閉じた。

この展示は、誰もがもつ身体に記憶された歩くという行為を非文字資料と捉え、これを展示のテーマとして設定した。展示場では観覧者がそれぞれの身体に埋め込まれている「あるく」行為の記憶を意識化する場として展示を展開した。本学の学生をはじめ、市民、研究者などさまざまな人々の参加が得られた。また、観覧者からは展示に関する評価をいただき、それを展示にフィードバックすることで、展示を通して発信者と受信者の相互の交流が図られる仕組みを取り入れ、「実験展示」の意義を再確認したことは大きな成果であった。



全体研究会

2007 年度

第 5 回 2007.12.21

堀内 寛晃「『海外神社』跡地に関するデータベース」構築、上田 純広「関東大震災・地図と写真データベース」構築に関する新手法、西田 幸夫「関東大震災における火災被害の可視可」、孫 安石「租界とアジアデータベース作成の中間報告」

第 4 回 2007.11.9

國広 暁子「ブリティッシュコロンビアにおける先住民『ベルダーシュ』」に関する調査報告、小野地 健「クシャミと人類文化」

第 3 回 2007.9.28

王 京「関東大震災と航空写真」

第 2 回 2007.6.29

的場 昭弘「ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』を読む ー非文字資料の理論化に向けてー」

第 1 回 2007.4.20

各班・課題からの昨年度研究成果報告

2006 年度

第 6 回 2007.2.16

佐野 賢治「インターネット・エコミュージアムの可能性」

第 5 回 2006.12.22

香月 洋一郎「手段としての写真『澁澤写真』の追跡調査から」

第 4 回 2006.11.10

君 康道、前田 禎彦「マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の現状と問題点」

第 3 回 2006.9.29

山口 建治「靱いの身体技法と人形」、夏 宇継「東巴求寿儀礼について」、廣田 律子「モーションキャプチャを応用した芸能比較研究」

第 2 回 2006.6.30

大里 浩秋・孫 安石・富井 正憲「租界と居留地に刻印された人間活動の営み」、津田 良樹・中島 三千男「環境に刻印された人間活動の痕跡解読-朝鮮の神社跡地を中心に」

第 1 回 2006.4.21

各班からの昨年度研究成果報告

2005 年度

第 2 回 2005 年 7 月 8 日 18:00～19:30 1 号館 804 会議室

4 班 木下 宏揚・木下 慶子(調査研究協力者)「COE における非文字資料の享有と流通 ―福島県只見町のデータ化に向けて―」、4 班 佐野 賢治「資料のコラボレーションから資料館建設まで ―飯豊山信仰展示を事例として―」

第 1 回 2005 年 5 月 13 日 17:30～19:00 1 号館 804 会議室

各班リーダー「昨年度の総括と本年度活動目標について」、八久保 厚志「『環境と景観の資料化と体系化にむけて』を発行して」

2004 年度

第 4 回 2004 年 11 月 12 日

落合 一泰「絵画から写真へ―非西洋諸民族表象における変化と無変化」

第 3 回 2004 年 9 月 29 日

田口 洋美「景観のモンタージュ ―狩猟と農耕の織り成す世界―」、富澤 達三「画像資料のデジタル化と歴史研究への活用」

第 2 回 2004 年 7 月 9 日

増野 恵子「明治前期のメディアと天皇肖像」

第 1 回 2004 年 5 月 14 日

「1 班・2 班・3 班・4 班本年度研究計画について」

2003 年度

第 4 回 2003 年 1 月 31 日

高橋 郁夫(弁護士)「知的財産権に対する技術のチャレンジ」

第 3 回 2003 年 12 月 5 日

河野 通明「身体技法・感性を手掛かりとした古代日本列島の多民族状況の検出の模索」

第 2 回 2003 年 10 月 31 日

川田 順造「非文字資料の諸相とその研究法―人類学の立場からの問題提起 ―音文化、身体技法、道具、感性等の領域」

第 1 回 2003 年 10 月 1 日

北原 糸子、原信田 實「地震の痕跡と名所絵 ―『名所江戸百景』の新しい読み方」、齊藤 隆弘「画像・動作情報のデジタル入力について」

事業推進組織

事業推進組織

本事業は、拠点となる大学院歴史民俗資料学研究科、日本常民文化研究所、外国語学研究科中国言語文化専攻の専任教員、および工学研究科専任教員で本事業の推進に必要とされる者を事業推進担当者とし、基幹的構成メンバーとする。このほかに COE 教員（COE で任用する特任教授および非常勤講師）を採用し、本事業に協力いただける学内外の研究者を COE 共同研究員に迎え、さらに COE 研究員（PD・RA）を加えて、本事業の研究体制は構築されている。これらの構成員は、本事業の研究テーマにしたがって編成された 6 つの班のいずれかに属し、研究に従事している。この研究組織を統括し、調整・指導する組織として拠点リーダー、サブリーダー、研究遂行責任者、事務局長で構成する COE 研究推進会議が設置されている。この推進会議は、本事業に係る研究教育計画の企画・立案および連絡・調整・補助金の経理管理に関する事項、その他本事業の実施に関して必要なすべての事項を審議・策定する。これが、本事業の実質的な指導部となる。

また、大学として COE に関する事項を審議する機関として、COE 拠点形成委員会が設置されている。この委員会は、学長に直属し、全学的に COE 事業を支援・調整するために設置されているもので、事業全体の意思決定をする最高機関となる。

学長－拠点形成委員会－研究推進会議－各班というラインが本事業の骨格となる組織であるが、研究活動自体は班が中心となる。各班は、随時班会議を開催し、調査・研究や資料整備等の計画の立案・実施、あるいは研究会の開催等、拠点形成事業の実質部分を担っているが、具体的な共同研究は各班に設定されている課題を単位として進められることが多い。そのほか、本拠点では、研究全体の進展状況を互いに確認し、拠点形成委員会・研究推進会議の決定を周知するために、研究担当者全員による全体会議を定期的に行っている。また、全体会議に合わせて、全体研究会も開催しているが、これは、研究対象が多岐にわたるため、相互に研究の進捗状況を確認し、各班の研究を「非文字資料の体系化」という全体のテーマと不断に関連付けながら遂行するために開催しているものである。



1 画像資料の体系化と情報発信 Systematization of Pictorial Materials and Their Dissemination

- マルチ言語版「絵巻物による日本常民生活絵引」の編纂
Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan
- 「日本近世・近代生活絵引」の編纂
Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan
- 「東アジア生活絵引」の編纂
Pictopedia of Everyday Life in East Asia

2 身体技法および感性の資料化と体系化 Systematic Documentation of Techniques of Body, Senses and Folk Implements

- 身体技法の比較研究
Comparative Study of Techniques of Body and Senses
- 用具と人間の動作の関係の分析
Analysis of the Relationship between Folk Implements and Human Movement

3 環境と景観の資料化と体系化 Arrangement and Systematization of the Environment and Scenery

- 景観の時系列的な研究
Research for Scenery in History
- 環境認識とその変遷の研究
Research of Environmental Recognition and Its Changes
- 研究に刻印された人間活動および災害の痕跡解読
Interpretation of Traces of Human Activity and Natural Disasters Inscribed into the Environment

4 地域統合情報発信 Dissemination of Regional Information

5 実験展示 Experimental Exhibition on Fruits of COE Program Activities

6 理論総括研究 Summarization of COE Program Activities and Research Results

拠点形成委員会

2003 年度(平成 15 年度)

2003 年	10 月 1 日(第 1 回)	副委員長・委員選出、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議内規 他
	10 月 29 日(第 2 回)	拠点リーダー・研究遂行責任者担当授業時間数軽減、COE 教員採用拠点形成費補助金使用に関する内規 他
	12 月 3 日(第 3 回)	COE 教員採用、ホームページ管理運用内規、外部評価依頼、海外研究者とのネットワーク形成 他
2004 年	1 月 13 日(第 4 回)	平成 16 年度 21 世紀 COE プログラム拠点形成調書 他
	1 月 28 日(第 5 回)	COE 教員人事、来年度研究組織、COE 共同研究員人事、外部評価実施、2004 年度 COE 研究員(PD・RA)募集 他
	3 月 10 日(第 6 回)	平成 16 年度 COE 研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)交付申請、来年度 COE 研究員(PD)任用期間の更新 他

2004 年度(平成 16 年度)

2004 年	4 月 21 日(第 1 回)	平成 15 年度「21 世紀 COE プログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)実績報告書、COE 研究員(RA)採用、施設、その他懸案事項 他
	5 月 26 日(第 2 回)	施設に関する要望、COE 共同研究員委嘱 他
	6 月 30 日(第 3 回)	本委員会委員交替、外部評価書への対応、若手研究者派遣・招聘 他
	9 月 29 日(第 4 回)	COE 教員の海外出張、海外研究機関との覚書締結、若手研究者の派遣・招聘、中間評価に対する対応、外部評価 他
	10 月 27 日(第 5 回)	COE 教員人事、海外研究機関との覚書締結、若手研究者招聘 他
	12 月 22 日(第 6 回)	事業推進担当者追加、平成 17 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点形成調書 他
2005 年	1 月 19 日(第 7 回)	21 世紀 COE プログラム「中間評価関係書類」 他
	2 月 2 日(第 8 回)	来年度 COE 共同研究員人事、2005 年度 COE 研究員(PD)募集要項 他
	3 月 2 日(第 9 回)	平成 17 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)交付申請、2005 年度 COE 研究員(PD)選考、2005 年度 COE 研究員(RA)募集要項 他

2005 年度(平成 17 年度)

2005 年	4 月 15 日(第 1 回)	研究推進会議委員交替、COE 研究員(RA)採用、中間評価のヒアリングの実施及び各関係調書 他
	4 月 20 日(第 2 回)	平成 16 年度「21 世紀 COE プログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)実績報告書、中間評価ヒアリング関係各種調書等事前提出資料 他
	9 月 28 日(第 3 回)	OE 教員人事、COE 研究員(RA)人事、現地調査及び追加説明資料、海外研究機関との覚書締結 他
	12 月 21 日(第 4 回)	COE 教員(非常勤講師)増員、来年度研究組織、来年度運営組織、来年度研究計画・予算、日本学術振興会(21 世紀 COE プログラム採択拠点分)候補者募集、海外研究機関との覚書締結 他
2006 年	1 月 11 日(第 5 回)	日本学術振興会特別研究員(21 世紀 COE プログラム採択分)候補者の選考方法、「21 世紀 COE プログラム」に関するアンケート 他
	1 月 25 日(第 6 回)	日本学術振興会特別研究員(21 世紀 COE プログラム採択分)候補者選考 他
	2 月 1 日(第 7 回)	COE 教員(非常勤講師)人事、来年度 COE 研究員(PD)募集要項 他
	3 月 8 日(第 8 回)	2006 年度 COE 研究員(PD)選考、研究推進会議委員交替、COE 共同研究員人事、2006 年度研究担当者の課題別所属、

		2006 年度課題別研究費、2006 年度 COR 研究員(RA)募集要項 他
	3 月 15 日(第 9 回)	平成 18 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)交付申請書類、「21 世紀 COE プログラム(平成 15 年度採択)進捗状況報告書(中間評価後修正変更版)提出書類、21 世紀 COE プログラム「研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)」に係わる代表等交代届 他

2006 年度(平成 18 年度)

2006 年	4 月 14 日(第 1 回)	拠点形成委員会委員交替、COE 研究員(RA)採用 他
	4 月 19 日(第 2 回)	平成 17 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)実績報告書、海外研究機関との覚書締結 他
	7 月 28 日(第 3 回)	外部評価書への対応案、本プログラムと他組織の共催 他
	9 月 27 日(第 4 回)	COE 教員人事 他
	10 月 11 日(第 5 回)	平成 18 年度研究拠点形成費補助金追加配分申請 他
	11 月 15 日(第 6 回)	平成 18 年度研究拠点形成費補助金交付申請、2007 年度予算編成の考え方 他
	12 月 20 日(第 7 回)	COE 研究員(PD)人事、サブリーダー代行人事、来年度事業推進担当者ならびに運営組織 他
2007 年	2 月 7 日(第 8 回)	21 世紀 COE プログラム平成 15 年度採択拠点に対するフォローアップ書面調査、来年度 COE 研究員(PD)募集要項 他
	3 月 7 日(第 9 回)	2007 年度 COE 研究員(PD)選考、来年度事業担当者の退任、COE 共同研究員人事、2007 年度研究担当者の課題別所属、平成 19 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)交付申請、2007 年度 COE 研究員(RA)募集要項 他

2007 年度(平成 19 年度)

2007 年	4 月 13 日(第 1 回)	拠点形成委員会委員交替、COE 研究員(RA)採用、代表者(学長)交替届 他
	4 月 18 日(第 2 回)	平成 18 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)実績報告書、海外提携校派遣若手研究者募集要項、海外提携校若手研究者招聘募集要項 他
	7 月 20 日(第 3 回)	外部評価書への対応、只見町との「学術交流に関する覚書」「映像資料及び写真資料の活用に関する覚書」、派遣研究員派遣、訪問研究員受け入れ、第 3 回 COE 国際シンポジウム開催について 他
	9 月 21 日(第 4 回)	研究成果報告書の刊行方法、若手研究者受け入れ、調査研究協力者登録、若手研究者ワークショップ開催計画、COE ホームページリニューアル 他
	12 月 19 日(第 5 回)	事後評価とそれへの対応について、COE 終了後の事業継承・発展計画、本年度外部評価委員及び外部評価スケジュール、研究成果報告書・データベース進捗状況、若手研究者ワークショップ、調査研究協力者の登録、COE 研究員(PD)の海外研究調査 他
2008 年	2 月 1 日(第 6 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、研究成果報告書・データベース進捗状況、地域統合情報発信データベース、ホームページリニューアル 他
	3 月 7 日(第 7 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、引継ぎ事項、実験展示巡回展、研究成果報告書・データベース進捗状況、第 4 ー四半期予算執行について

研究推進会議

2003 年度(平成 15 年度)

2003 年	8 月 18 日(第 1 回)	日本学術振興会特別研究員の推薦について 他
	9 月 19 日(第 2 回)	COE 研究員(PD・RA)の選考、班別組織、班別研究費 他
	10 月 29 日(第 3 回)	本年度予算、研究成果とりまとめ、COE 調査研究協力者、COE 研究員(PD・RA)指導教員者、COE 研究員(PD・RA)指導教員・研究業務、ニューズレター発行 他
	12 月 3 日(第 4 回)	COE 教員採用、外部評価依頼、海外研究者とのネットワーク、2004 年度予算編成の基本的考え方 他
	12 月 3 日(第 5 回)	「平成 16 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点調書」、COE 教員採用、来年度研究組織、平成 16 年度 PD・RA 募集 他
2004 年	1 月 13 日(第 6 回)	「平成 16 年度 21 世紀 COE プログラム研究拠点調書」、平成 15 年度年報案 他

2004 年度(平成 16 年度)

2004 年	4 月 16 日(第 1 回)	昨年度研究拠点形成費実績報告、2004 年度 COE 研究員(RA)選考、今年度研究実績計画 他
	5 月 26 日(第 2 回)	外部評価書の対応、COE 研究員(PD・RA)の研究業務、COE 共同研究員の追加委嘱 他
	6 月 30 日(第 3 回)	若手研究者の派遣・招聘、海外提携対象機関の追加 他
	7 月 30 日(第 4 回)	第 2 四半期の予算執行、2003 年度外部評価対応の具体化の方策 他
	9 月 29 日(第 5 回)	海外研究機関との覚書締結、海外提携研究機関への若手研究者の派遣、COE 概要の刊行 他
	10 月 27 日(第 6 回)	COE 教員人事、2005 年度事業計画、2005 年度予算編成の基本的考え方、文部科学省に提出する中間報告書作成準備 他
	12 月 15 日(第 7 回)	2005 年度研究計画・研究組織、中間評価実施への対応、研究拠点形成調書提出 他
	12 月 22 日(第 8 回)	中間評価実施への対応、2005 年度予算、事業推進担当者の追加 他
2005 年	1 月 11 日(第 9 回)	研究拠点形成調書提出、収集資料等の保存・管理(案)について 他
	1 月 19 日(第 10 回)	中間評価関係書類について、2005 年度 COE 共同研究員人事 他
	2 月 2 日(第 11 回)	2005 年度 COE 共同研究員人事、国際シンポジウム実施委員会について 他
	3 月 2 日(第 12 回)	2005 年度 COE 研究員(PD)の選考、COE 研究員(RA)の募集要項(案) 他

2005 年度(平成 17 年度)

2005 年	4 月 15 日(第 1 回)	研究推進会議委員の交代、COE 研究員(RA)の選考、中間評価のヒアリングの実施及び各関係調書等の提出について 他
	4 月 20 日(第 2 回)	研究拠点形成費の実績報告書、中間評価ヒアリング提出資料、国際シンポジウム実施計画案について 他
	5 月 25 日(第 3 回)	情報発信及び実験展示・高度学芸員養成に関するワーキンググループ編成、海外提携機関への若手研究者派遣、COE 研究員(RA)の指導教授について 他
	6 月 1 日(第 4 回)	中間評価の現地調査への対応、第 1 四半期予算執行状況について 他
	6 月 29 日(第 5 回)	中間評価の現地調査への対応、データベースの作成及び公開について 他
	7 月 8 日(第 6 回)	中間評価現地調査質問事項への対応、調査研究協力者の登録について 他

	7 月 29 日(第 7 回)	中間評価現地調査報告、海外提携研究機関への派遣・訪問研究員について 他
	9 月 1 日(第 8 回)	現地調査および追加説明資料、実験展示および高度専門職学芸員養成方法検討、ワーキンググループ答申について 他
	9 月 28 日(第 9 回)	COE 教員・COE 研究員(RA)人事、外部評価への対応、地域における統合と情報発信検討、派遣研究員および訪問研究員について 他
	10 月 26 日(第 10 回)	06 年度以降の組織・事業計画、統合情報発信班発足、本年度外部評価委員および実施日程、年報執筆者エントリー状況について 他
	11 月 30 日(第 11 回)	06 年度研究組織、派遣研究員募集結果、訪問研究員受入れ、国際シンポジウム、プレシンポジウム報告書について 他
	12 月 21 日(第 12 回)	06 年度研究組織・研究計画、COE 教員増員、日本学術振興会特別研究員募集について 他
2006 年	1 月 11 日(第 13 回)	日本学術振興会特別研究員候補者選考、2006 年度研究計画・予算、第 3－四半期の予算執行について 他
	1 月 25 日(第 14 回)	日本学術振興会特別研究員候補者選考について 他
	2 月 1 日(第 15 回)	COE 教員(非常勤講師)人事の承認、2006 年度組織体制・研究計画について 他
	3 月 8 日(第 16 回)	COE 研究員(PD)選考、2006 年度組織体制、2006 年度 COE 補助金内定通知、RA 研究員募集要項について 他
	3 月 15 日(第 17 回)	2006 年度研究拠点形成費交付申請書類、進捗状況報告書提出書類について 他

2006 年度(平成 18 年度)

2006 年	4 月 14 日(第 1 回)	2006 年度事業推進組織、国際シンポジウム実施計画(案)について 他
	4 月 19 日(第 2 回)	研究拠点形成費の実績報告書、浙江工商大学日本文化研究所との覚書締結、海外提携研究機関派遣・招聘研究者募集要項(案)について 他
	5 月 24 日(第 3 回)	海外提携研究機関派遣研究員、訪問研究員、ジョイントワークショップについて 他
	6 月 28 日(第 4 回)	海外提携研究機関への派遣若手研究者選考と派遣期間の変更、および訪問研究員受入れ、第 2 回 COE 国際シンポジウムについて 他
	7 月 28 日(第 5 回)	外部評価書への対応案、本プログラムの最終研究成果とりまとめ、班・課題班のデータベース構築及び印刷物等の刊行計画について 他
	9 月 27 日(第 6 回)	外部評価書への対応案、本プログラムの最終研究成果とりまとめ、班・課題班のデータベース構築及び印刷物等の刊行計画について 他
	10 月 11 日(第 7 回)	平成 18 年度研究拠点形成費補助金の追加配分申請、海外提携研究機関からの訪問研究員の受入れについて 他
	10 月 25 日(第 8 回)	本年度外部評価委員及び評価日程、海外提携研究機関からの訪問研究員の受入れ、5 年目の研究成果論文集刊行について 他
	11 月 15 日(第 9 回)	平成 18 年度研究拠点形成費補助金の交付申請(追加配分)、2007 年度予算編成の考え方について 他
	11 月 29 日(第 10 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、本年度外部評価委員および日程、第 3 回国際シンポジウム実施委員会委員について 他
	12 月 20 日(第 11 回)	COE 研究員(PD)人事、来年度事業推進担当者・運営組織、来年度研究計画・予算について 他
2007 年	2 月 7 日(第 12 回)	2007 年度研究計画・予算、COE 終了後の事業継承、発展計画について 他
	3 月 7 日(第 13 回)	2007 年度 COE 研究員(PD)の選考、共同研究員人事について 他

2007 年度(平成 19 年度)

2007 年	4 月 13 日(第 1 回)	2007 年度 COE 研究員(PD)の選考、2007 年度研究担当者の研究班等の所属について 他
--------	-----------------	---

	4 月 18 日(第 2 回)	2006 年度研究拠点形成費の実績報告書、海外提携研究機関派遣・招聘若手研究者募集要項(案)について 他
	5 月 23 日(第 3 回)	海外提携研究機関派遣研究員選考、COE 研究員(PD・RA)の研究業務分担について 他
	6 月 29 日(第 4 回)	映像資料及び写真資料の活用に関する覚書、映像利用許諾書、海外提携研究機関からの訪問研究員受け入れ、第 3 回国際シンポジウム、外部評価書への対応 他
	7 月 20 日(第 5 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、只見町との覚書、実験展示開催期間の変更及び開催要項 他
	9 月 21 日(第 6 回)	2008 年度 COE 後継組織(暫定)予算要望(案)、研究成果報告書、訪問研究員受け入れについて 他
	10 月 19 日(第 7 回)	本年度外部評価委員及び評価日程、COE 終了後の事業継承・発展計画、研究成果報告書・データベース進捗状況、調査研究協力者の登録 他
	11 月 28 日(第 8 回)	研究成果報告書・データベース進捗状況、データベース掲載の共通様式及びホームページ掲載に伴う諸問題、COE 終了後の事業継承・発展計画、COE 研究員(PD)の海外研究調査 他
	12 月 19 日(第 9 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、事後評価とそれへの対応について、研究成果報告書・データベース進捗状況、若手研究者ワークショップ開催計画 他
2008 年	2 月 1 日(第 10 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、事後評価とそれへの対応について、研究成果報告書・データベース進捗状況、若手研究者ワークショップ開催計画 他
	3 月 7 日(第 11 回)	COE 終了後の事業継承・発展計画、引継ぎ事項、実験展示巡回展、研究成果報告書・データベース進捗状況、第 4－四半期予算執行について

事業推進組織

全体会議

2003 年度(平成 15 年度)		
2003 年	7 月 28 日(第 1 回)	研究組織について 他
	9 月 1 日(第 2 回)	経過報告、研究組織の確定、研究実施に関する諸規程、研究計画及び予算執行計画、施設・人員その他の支援体制 他
	10 月 1 日(第 3 回)	研究組織、COE 研究員(PD・RA)採用 他
	10 月 31 日(第 4 回)	本年度予算、COE 共同研究員の委嘱、調査研究協力者、COE 研究員(PD・RA)の指導教員及び研究業務、ホームページ 他
	12 月 5 日(第 5 回)	COE 教員採用、「採択拠概要」提出、来年度研究計画、外部評価依頼、海外研究者とのネットワーク形成、2004 年度予算編成の基本的考え方 他
2004 年	1 月 31 日(第 6 回)	2004 年度 COE 教員人事、来年度研究組織、COE 共同研究員人事 2003 年度年編集委員会、海外研究機関とのネットワーク形成 他
2004 年度(平成 16 年度)		
2004 年	5 月 14 日(第 1 回)	本年度研究実施計画、本年度予算執行、実績報告書、COE 研究員(PD・RA)採用、広報委員会 他
	7 月 9 日(第 2 回)	COE 共同研究員委嘱、PD・RA の研究業務、外部評価への対応、若手研究者派遣・招聘、調査研究協力者の登録 他
	9 月 29 日(第 3 回)	海外研究機関との覚書締結、若手研究者派遣・招聘、中間評価対応、調査研究者登録 他
	11 月 12 日(第 4 回)	2005 年度予算編成の基本的考え方、各班研究の進捗状況と課題、海外研究機関との覚書締結 他

2005 年度(平成 17 年度)

2005 年	5 月 13 日(第 1 回)	本年度研究実施計画、実績報告書、調査研究協力者登録、COE 国際シンポジウム実施案 他
	7 月 8 日(第 2 回)	中間評価現地調査対応、情報発信ワーキンググループ編成、若手研究者派遣・招聘、調査研究協力者登録、ホームページリニューアル、データベース作成及び公開 他
	11 月 11 日(第 3 回)	現地調査および 06 年度以降の組織・事業計画、ワーキンググループ答申、外部評価対応他

2006 年度(平成 18 年度)

2006 年	4 月 21 日(第 1 回)	2006 年度事業推進組織、研究実施計画、予算他
	6 月 30 日(第 2 回)	若手研究者派遣・招聘、立命館大学・神奈川大学 21 世紀 COE プログラムジョイントワークショップ、第 2 回 COE 国際シンポジウム 他
	9 月 29 日(第 3 回)	最終成果とりまとめ、COE 終了後の事業継続・発展計画 他
	11 月 10 日(第 4 回)	COE 終了後の事業継続・発展計画、5 年目の研究成果論文集刊行 他
	12 月 22 日(第 5 回)	来年度事業推進担当者・運営組織、予算編成の基本的考え方 他
2007 年	2 月 16 日(第 6 回)	2003 年度採択拠点に対するフォローアップ、2007 年度研究組織 他

2007 年度(平成 19 年度)

2007 年	4 月 20 日(第 1 回)	本年度事業推進組織、研究実施計画、予算、若手研究者派遣・招聘 他
	6 月 29 日(第 2 回)	只見町との学術交流覚書締結、COE 終了後の事業継続・発展計画、若手研究者派遣・招聘、第 3 回 COE 国際シンポジウム、外部評価書対応、最終成果報告書総括編纂計画、ホームページリニューアル 他
	9 月 28 日(第 3 回)	研究成果報告書の刊行、実験展示開催期間の変更及び開催要領、若手研究者招聘、調査研究協力者登録、若手研究者ワークショップ開催 他
	11 月 9 日(第 4 回)	COE 終了後の事業継続・発展計画、本年度外部評価委員及び外部評価日程、最終成果報告書・データベース進捗状況、調査研究協力者の登録 他
	12 月 21 日(第 5 回)	COE 終了後の事業継続・発展計画、事後評価とそれへの対応について、調査研究協力者の登録、COE 研究員(PD)の海外研究調査について 他
2008 年	2 月 15 日(第 6 回)	COE 終了後の事業継続・発展計画、班・課題の成果要約、・データベース共通表記事項の変更、最終研究成果発信に伴うホームページリニューアル共通表記事項の変更、最終研究成果発信に伴うホームページリニューアル、調査研究協力者の登録、若手研究者ワークショップ、第 3 回 COE 国際シンポジウムについて 他

若手研究者の育成

若手研究者の育成



本プログラムでは、学内外の博士課程修了者（単位取得満期退学者を含む）を対象とする COE 研究員（PD）と、本学大学院博士後期課程在学者を対象とする同（RA）という制度を設けて、国際的に活躍が期待できる若手研究者の育成をめざした。この制度は、それぞれの研究員が本プログラムの調査・研究活動に参加し、また自己の研究課題に取り組み、非文字資料を対象とする研究者に成長することを支援するものである。5 年間の事業推進期間中、PD については、実数 9、延べ 16 名を採用した。そのうち 5 名を派遣研究者として海外の提携研究機関に派遣し、報告書の執筆など研究成果をあげた。その結果、PD1 名が国立大学専任講師に採用され、1 名が博士の学位を取得した。また、RA についても、5 年間で実数 12、延べ 22 名を採用した。そのうち 3 名が学位論文を取得した。この RA の中からも中国に 5 名、ブラジルに 2 名をそれぞれ提携研究機関へ派遣した。

この派遣研究員制度とともに、訪問研究員制度により海外提携研究機関の若手研究者を招いて共同研究を推進した。本プログラムの拠点の 1 つである歴史民俗資料学研究科では、すでにフランス・中国・韓国・コンゴなどの博士後期課程留学生、さらに日本常民文化研究所ではアメリカ合衆国・カナダ・ブラジル・中国・韓国などの若手研究者を外国人研究員として受け入れ、国際的な学術交流に大きな成果をあげているが、訪問研究員の受け入れはそれをさらに発展させることになった。プログラム推進期間中、中国 17 名、韓国 1 名、ブラジル 4 名、カナダ 2 名など合計 24 名の若手研究員を受け入れた。

こうした本プログラム採択後の教育環境の下で、歴史民俗資料学研究科では 14 名の院生が新たに課程博士の学位を取得した（2007 年度取得見込みを含む）。PD・RA を含む院生の論文・調査報告などの研究成果は、レフェリー制度をとる『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』や紀要『歴史民俗資料学研究』に主に掲載され公開された。また、最終年度の PD・RA による研究成果は、『非文字資料研究の可能性—若手研究者成果論文集』として結実した。なお、この間、歴史民俗資料学研究科の課程博士修了者 2 名が私立大学の兼任講師として採用され、中国言語文化専攻の修了者 1 名も本学の専任講師として教育研究にあたっている。さらに、日本常民文化研究所特別研究員のうち、1 名が民俗学担当助（准）教授として国内の大学に採用された。

・ COE 研究員 (PD)

網野 暁 AMINO Satoru

COE 研究員 (PD)

2003 年度・2004 年度

専門: 日本史

王 京 WANG Jing

COE 研究員 (PD)

2007 年度

COE 研究員 (RA)

2005 年度・2006 年度

1 班 課題 3

専門: 民俗学

小野地 健 ONOCHI Takeru

COE 研究員 (PD)

2007 年度

4 班

専門: 文化人類学

櫻村 賢二 KASHIMURA Kennji

COE 研究員 (PD)

2005 年度・2006 年度

COE 研究員 (RA)

2004 年度

3 班 課題 1

専門: 民俗学

國弘 暁子 KUNIHIRO Akiko

COE 研究員 (PD)

2006 年度～2007 年度

2 班 課題 1

専門: 文化人類学

富澤 達三 TOMIZAWA Tatsuzo

COE 研究員 (PD)

2003 年度・2004 年度

調査研究協力者

2005 年度～2007 年度

所属: 葛飾区郷土と天文の博物館、日本常民文化研究所特別研究員

役職: 専門調査員(歴史分野)

専門: 日本近世史・歴史民俗資料学・メディア史・博物館学

藤永 豪 FUJINAGA Go

COE 研究員(PD)

2003 年度～2005 年度

調査研究協力者

2006 年度

専門: 地理学

本田 佳奈 HONDA Kana

COE 研究員(PD)

2006 年度

3 班 課題 1

専門: 日本史

丸山 泰明 MARUYAMA Yasuaki

COE 研究員(PD)

2005 年度・2006 年度

5 班

専門: 民俗学

・ COE 研究員 (RA)

王 京 WANG Jing

COE 研究員(PD)

2007 年度

COE 研究員(RA)

2005 年度・2006 年度

1 班 課題 3

専門: 民俗学

大坪 潤子 OTSUBO Junko

COE 研究員(RA)

2004 年度

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 近現代史(銅像史)

大西 万知子 ONISHI Machiko

COE 研究員(RA)

2003 年度・2004 年度

専門: 博物館人類学

櫻村 賢二 KASHIMURA Kennji

COE 研究員 (PD)

2005 年度・2006 年度

COE 研究員 (RA)

2004 年度

3 班 課題 1

専門: 民俗学

小林 光一郎 KOBAYASHI Koichiro

COE 研究員 (RA)

2005 年度

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 民俗学

佐々木 弘美 SASAKI Hiromi

COE 研究員 (RA)

2007 年度

1 班 課題 2

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 日本史

高野 宏康 TAKANO Hiroyasu

日本学術振興会特別研究員 (21COE)

2003.10.1～2006.3.31

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 政治文化史、歴史民俗資料学

土田 拓 TSUCHIDA Taku

COE 研究員 (RA)

2005 年度～2007 年度

3 班 課題 1

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 民俗学

中町 泰子 NAKAMACHI Yasuko

COE 研究員 (RA)

2003 年度・2004 年度

調査研究協力者

2005 年度

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 生活文化史、民俗学

フレデリック・ルシーニュ

Frederic LESIGNE

COE 研究員 (RA)

2003 年度・2006 年度

調査研究協力者

2005 年度・2007 年度

6 班

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 日本民俗学の研究史

彭 偉 文 PENG Weiwen

COE 研究員 (RA)

2004 年度～2007 年度

1 班 課題 3

所属: 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

専門: 民俗学

宮本 大輔 MIYAMOTO Daisuke

COE 研究員 (RA)

2005 年度

日本学術振興会特別研究員 (21COE)

2006.4.1～2008.3.31

所属: 外国語学研究科中国言語文化専攻博士後期課程

劉 渴 氷 LIU Kebing

COE 研究員 (RA)

2006 年度・2007 年度

3 班 課題 3

所属: 外国語学研究科中国言語文化専攻博士後期課程

専門: 中国古典に表れた色彩語

海外派遣研究

2004 年度			
氏 名	派遣先提携研究機関名	派遣期間	研究課題
フジナガ ゴウ 藤永 豪	北京師範大学民俗学与文化人類学研 究所	2004 年 11 月 9 日～ 2004 年 12 月 1 日	北京市郊外における農村の景観変化に関する調査・ 研究
2005 年度			
氏 名	派遣先提携研究機関名	派遣期間	研究課題

オウ キョウ 王 京	北京師範大学民俗学与文化人類学研究所	2005 年 7 月 6 日～ 2006 年 7 月 19 日～	1930～1940 年代の日本民俗学と中国
ハウ イブン 彭 偉 文	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター	2005 年 9 月 7 日～ 2005 年 9 月 20 日	上海およびその周辺におけるさまざまな靈獣舞の研究
ミヤモト ダイスケ 宮本 大輔	浙江大学日本文化研究所	2005 年 11 月 1 日～ 2005 年 11 月 14 日	浙江人の言語評価-大学生を中心に-
カシムラ ケンジ 樫村 賢二	延世大学中央博物館	2005 年 12 月 1 日～ 2005 年 12 月 14 日	オートバイ宅急便からみる韓国社会について
オオニシ マチコ 大西 万知子	サンパウロ大学日本文化研究所	2005 年 12 月 2 日～ 2005 年 12 月 18 日	アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信(展示)の発達比較

2006 年度

氏 名	派遣先提携研究機関名	派遣期間	研究課題
オウ キョウ 王 京	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター	2006 年 7 月 2 日～ 2006 年 7 月 15 日	戦前期の上海と民俗学
ホンダ カナ 本田 佳奈	ブリティッシュコロンビア大学アジア学科	2006 年 10 月 1 日～ 2006 年 10 月 15 日	ブリティッシュコロンビアにおける日系移民家庭への聞き取り調査と資料収集
クニヒロ アキコ 國弘 暁子	サンパウロ大学日本文化研究所	2006 年 10 月 30 日～ 2006 年 11 月 15 日	ブラジルのトラベスティに関する人類学的調査研究
ハウ イブン 彭 偉 文	中山大学中国非物質文化遺産研究センター	2006 年 11 月 1 日～ 2006 年 11 月 14 日	日本の獅子舞を中心に東アジアにおける靈獣の舞研究

2007 年度

氏 名	派遣先提携研究機関名	派遣期間	研究課題
サカイ ミカ 坂井 美香	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター	2007 年 8 月 13 日～ 2007 年 8 月 26 日	電気映像を用いない情報伝達の方法と効用および語り芸について
オウ キョウ 王 京	中山大学中国非物質文化遺産研究センター	2007 年 11 月 5 日～ 2007 年 11 月 18 日	戦前広州における民俗学活動
クニヒロ アキコ 國弘 暁子	ブリティッシュコロンビア大学アジア学科	2007 年 10 月 1 日～ 2007 年 10 月 15 日	インド、グジャラート州からカナダへの人の移動と、移住者の生活空間に関する調査研究

海外研究機関との連携

国際的な交流関係の構築

本プログラムでは、非文字資料にかかわる学術情報の交換と若手研究者の派遣・招聘を目的として、海外の研究機関との交流・提携事業を進めている。2006 年度現在で提携関係を結んでいるのは、華東師範大学・北京師範大学・浙江工商大学・中山大学・香港大学（以上中国）、延世大学（韓国）、プリティッシュコロンビア大学（カナダ）、サンパウロ大学（ブラジル）である。国際シンポジウムには、海外提携機関の代表者も招き、意見交換とともに国際交流と研究協力関係の推進を図った。訪問研究員制度を設け、提携機関の若手研究員を招いて共同研究を推進している。招聘は、当面、2 週間程度と短期であるが、それによって、派遣研究員と同様、将来、国際的に活躍できるような研究者に育っていくための基礎が作られることを期待している。2007 年度末までに、24 名を招聘した。いずれも日本の非文字資料研究を課題とする若手研究者たちであり、日本で収集した資料や文献を基礎に博士論文を完成させた者もいる。

さらに、プログラムの研究事業を世界的水準のものにするため、国際シンポジウムを開催して共同研究の成果を国内外の研究者に問いかけている。2005 年度に第 1 回国際シンポジウム「非文字資料とは何か ー人類文化の記憶と記録ー」、2006 年度に第 2 回国際シンポジウム「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」を開催し、本プログラム研究内容について、国内外の研究者の批判と提言を出してもらった。

提携研究機関紹介

1 華東師範大学

上海市にある総合大学であり、1951 年上海市内のいくつかの大学が合併して創立された。多くの学部を擁しているが、そのなかで近年発展めざましいのが対外漢語学院である。中国語と中国文化を学ぼうとする世界各地の学生が集っている。そのなかに設置されている大学院は、中国文化の研究を進めており、中国各地から進学してくる。特に幅広く研究活動を行い、民俗学界に影響のある陳勤建教授が所長を務める中国民俗保護開発センターは、多くの民俗学研究者を養成しており、優秀な博士論文を提出した若手研究者も少なくない。学院の性格もあり、研究センターは世界各地での学術活動、学術協力を進めているが、日本の研究者との交流も盛んに行われている。神奈川大学 21 世紀 COE プログラムが提携したのはこの研究所である。

2 北京師範大学

北京市にある総合大学である。多くの学部をもつなかで、特に中文系は中心的な存在であり、中国民俗学の開拓者鐘敬文教授や書家で日本でも有名な啓功教授など多くの優れた教授を擁し、活発に学術研究を展開してきた。なかでも鐘敬文教授が開拓した民間文学研究室は、中国の民俗学研究の拠点として活動し、多くの博士を生み出し、全国的に活躍している。鐘教授が 2002 年に亡くなって以降、民俗学研究はいくつかの専門組織に別れて活動を展開しているが、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムが提携したのは、劉鉄梁教授を所長とする民俗学与文化人類学研究所である。民俗学を中心としたフィールドワークを行い、大きな成果をあげており、研究所メンバーの近年の成果としては『中国民俗文化誌』の北京編を地区毎に刊行している。

3 浙江工商大学

1911 年、杭州中等商業学堂として設立され、1980 年には大学に昇格し浙江商学院となった。更に 2004 年浙江工商大学と改名し、経営経済を中心とする六学部の総合大学になった。同大学の中で、本学 COE と研究交流を行っているのは日本語文化学院及び日本文化研究所である。

もともと同研究所は浙江大学（旧杭州大学）に付置されていたが、工商大学が総合大学となったのを機に、研究所とほとんどのメンバーが移籍し、中国江南地域の日本研究の中心として現在に至っている。

同研究所を支えているのは二人の王氏、唐代を中心とした日中交流史研究の第一人者王勇氏と、近世文学の碩学王宝平氏の二人である。二人は八十年代の極めて厳しい研究環境の中、日本研究の専門家として、中国の研究をリードしてきたが、最近では自らの研究とともに、若手の育成にエネルギーを注いでいる。特に、自らの専門分野に限定せず、日本の古典文化から現代のポップカルチャーに及び、ユニークな研究者が育ってきている。中国における今後の日本研究がどの方向に向かっていくのかを知る上でも、浙江工商大学と日本文化研究所から目が離せない。

4 中山大学

広東省広州市にある歴史のある総合大学である。1924 年に孫文によって創立された。広大な緑豊かなキャンパスのなかに校舎が点在する。中文系はそのなかでも重要な位置を占める学部であり、古い歴史を持つが、近年は中文系を基礎に設置された中国非物質文化遺産研究センターの活動が目立っている。これは日本の 21 世紀 COE プログラムに相当する中国政府教育部人文社会科学重点研究基地であり、国からの補助金によって大規模な調査研究を展開している。研究活動の柱は、伝統戯曲の調査、口頭文芸と民俗の調査研究、それに非物質文化遺産保護対策の 3 つである。スタッフは戯曲研究の康保成、民俗研究の葉春生、非物質文化遺産対策の高小康などの教授を擁している。本プログラムとの提携は 2005 年からであるが、相互訪問は頻繁に行われ、中山大学開催のシンポジウムにも参加している。

5 香港大学

いまや世界経済を牽引する中国は、政治的には社会主義体制をとりながら台湾との統一を睨みつつ、「一国両制」という政治体制を香港特別行政区で実験している。この香港特別行政区の高等教育を担当する最高学部が香港大学と香港中文大学である。香港大学は、1877 年に創立された香港医科大学を前身とする香港でもっとも歴史の古い大学で、現在は医学部、工学部の他、文学部、教育学部、人文学部、社会学部など文科系の学部を有する香港を代表する大学である。なかでも、香港大学のアジア研究（Centre of Asian Studies、亞洲研究中心）と日本研究（Faculty of Arts, Japanese Studies）の水準が高いことには定評があり、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムとは、COE 研究拠点のひとつである大学院中国言語専攻の紹介でこれらの学部や研究機関と提携関係を結び、活発な研究者の交流とシンポジウムへの参加などを実現している。

6 延世大学

韓国の大学は国立のソウル大学と私学の延世大学と高麗大学がピラミッド型の頂点に位置する構造をとっている。延世大学は朝鮮時代末期の 1885 年に設立されたセブランス医学専門学校を前身とするが、1970 年代以降は文科系に関連する支援を大幅に拡大している。延世大学付設の中央博物館は 1928 年に開館し、韓国の大学付設の博物館の嚆矢といわれ、とくに、韓国の伝統文化に関連する文化資源の収集と研究には定評がある。1988 年には大学の 100 周年記念事業として中央博物館の新館が完成し、歴史、民俗、陶磁器などを展示する 9 つの常設展示室が設けられた。また、近年は韓国の儒教と朝鮮時代の古典研究をリードする「国学研究院」の活動が世間の注目を集め、2001 年度からは韓国の学術振興財団の支援による研究プロジェクト「開港前後の韓国の伝統社会の変動と近代化の模索」が選定された。「国学研究院」が発行する雑誌『東方学志』は、韓国の学術振興

財団の評価によって全国 A ランクの学術誌として高く評価されている。神奈川大学 COE プログラムは、延世大学の中央博物館と「国学研究院」、そして、人文学部と活発な情報交換と人的交流を行っている。

7 ブリティッシュコロンビア大学

カナダ太平洋岸の中心都市バンクーバーにある総合大学である。1961 年に設立されたアジア研究学部はカナダのみならず、北アメリカにおけるアジア研究をリードする存在である。また、この学部の研究を支えるアジア研究所は 1978 年に設立され、現在は日本研究センター、中国研究センター、韓国研究センターなど 5 つのセンターをもち、日本はもちろんのこと、アジア各地域の歴史、文学、社会、言語を専攻する研究者を擁している。特に日本については、日本古典文学と日本文化に関する研究者が揃っており、北米における日本文化研究の中心的存在となるべき条件が整えられている。また、アジア研究センターに付属して、新渡戸稲造を記念した新渡戸庭園があり、日本への親近性に満ちた雰囲気を作りだしている。本プログラムの第 2 回、第 3 回の国際シンポジウムにも研究者の参加を得て、活発な討論が展開され、また、2006 年には同大で開催された「日本における旅の文化」のシンポジウムに本プログラムから 2 名が参加した。

8 サンパウロ大学

サンパウロ大学日本文化研究所は、地上三階、地下一階の立派な独立した建物で、研究室、講義室、図書室、展示スペースを持ち、大学市として独立した自治体を形成するほど広大なサンパウロ大学の構内の一角にある。ちなみに、同大学には文化人類学の碩学レヴィストロースも席を置いたことがあり、人類文化の研究には長い伝統を持ち、立派な民俗博物館もある。研究所の建物は鬱蒼たる樹木に覆われ、研究所らしい雰囲気に満ちている。研究所は、鈴木悌一、前川隆らブラジルにおける日本学の草創期の研究者によって創立された。現在、スタッフは織田順子所長以下教授、助教授 7 名の所員と職員数名で構成され、サンパウロ州のみならずブラジルにおける日本文化研究のセンターとなっている。また、日本学科の大学院の講義もここで行われている。従来、日本語、日本文学の研究が中心であったが、近年文化人類学のスタッフを加え、日本文化全体に研究対象を広げつつある。

提携研究機関研究者招聘

提携研究機関研究者招聘

2004 年度～2007 年度 海外提携研究機関からの訪問研究員一覧

2004 年度				
氏 名	所属研究機関等	受け入れ期間	指導教員 (チューター)	研究課題
JIANG JING 江 静	浙江大学日本文化研究所専任講師 浙江大学人文学院中国古代史専攻	2004 年 11 月 29 日～ 2006 年 12 月 12 日	三鬼 清一郎 (網野 暁)	日中交流史
HAN TONG CHUN 韓 同 春	北京師範大学民俗学与文化人類学研究所 北京師範大学大学院民俗学専攻	2004 年 12 月 1 日～ 2004 年 12 月 14 日	福田 アジオ (彭 偉 文)	民俗学
YOON HYUN JIN 尹 賢 鎮	延世大学校中央博物館学芸員 高麗大学ヴィジュアルカルチャー専攻	2004 年 12 月 6 日～ 2004 年 12 月 19 日	中島 三千男 (金 花子)	韓国近現代美術史
MAO QIAO HUI 毛 巧 暉	華東師範大学中国民俗保護開発センター 華東師範大学民俗学専攻 山西師範大学助手	2004 年 12 月 12 日～ 2004 年 12 月 25 日	佐野 賢治 (ムカイダイス)	女性民俗
CHAMAS FERNANDO CARLOS	サンパウロ大学日本文化研究所 サンパウロ大学日本文化専攻	2005 年 1 月 26 日～ 2005 年 2 月 11 日	橘川 俊忠 (永井 美穂)	日本文化
2005 年度				
氏 名	所属研究機関等	受け入れ期間	指導教員 (チューター)	研究課題
YUE YONGYI 岳 永 逸	北京師範大学民俗学与文化人類学研究所教員	2005 年 7 月 15 日～ 2005 年 7 月 28 日	山口 建治 (宮本 大輔)	都市民俗学 民間信仰
YIN XIOFEI 尹 笑 非	華東師範大学中国民俗保護開発センター 華東師範大学民俗学専攻	2005 年 9 月 17 日～ 2005 年 9 月 30 日	廣田 律子 (川島 純枝)	民俗学
WANG XIN 王 欣	浙江大学客員研究員 浙江工商大学教員(助手)	2005 年 11 月 8 日～ 2005 年 11 月 21 日	中村 政則 (丸山 泰明)	教科書における中国関係の挿絵
DIOGO KAUPATEZ	サンパウロ大学日本文化研究所 サンパウロ大学日本文化専攻	2005 年 11 月 13 日～ 2006 年 11 月 29 日	田上 繁 (土田 拓)	北斎・北斎漫画・浮世絵

CHAN WING YAN 陳穎恩	香港大学日本文化研究学系 香港大学現代日本経済史専攻	2005 年 12 月 5 日～ 2005 年 12 月 18 日	田島 佳也 (藤永 豪)	日本の都市計画、経済環境、 市民生活
SONG JUNHUA 宋俊華	中山大学非物質文化遺産研究センター助教授	2006 年 2 月 22 日～ 2006 年 3 月 7 日	鈴木 陽一 (王 京)	非物質文化遺産
2006 年度				
氏 名	所属研究機関等	受け入れ期間	指導教員 (チューター)	研究課題
DAI LAN 戴 嵐	華東師範大学中国民俗保護 開発センター 華東師範大学民俗学専攻博 士生	2006 年 7 月 6 日～ 2006 年 7 月 19 日	中村 ひろ子 (彭 偉 文)	日本の童話に登場する少女の 挿絵
CAO RONG 曹 栄	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所 博士生	2006 年 9 月 2 日～ 2006 年 9 月 15 日	佐野 賢治	鎖国政策下の日本天主教或 いは基督教信仰
WONG CHI HANG 王 志恒	香港大学日本ドラマ専攻 修士生・RA 研究員	2006 年 10 月 7 日～ 2006 年 10 月 20 日	孫 安石 (武吉 彩華、康 正梅)	日本のTVドラマの制作と視聴 者動向
LIU XIAOCHUN 劉 曉 春	中山大学非物質文化遺産研 究センター助教授	2006 年 10 月 2 日～ 2006 年 10 月 14 日	香月 洋一郎 (宮本 大輔、彭 偉 文)	人類文化研究非文字資料体 系化及び民俗学相関研究・資 料調査学術研究
WA YUHUA 吳 毓 華	浙江工商大学日本語言文化 学院教員(助手)	2006 年 10 月 1 日～ 2006 年 10 月 14 日	鈴木 陽一 (丸山 泰明)	『清末民初報刊図画集成』に おける日本像
唐沢 ダニエラ	サンパウロ大学大学院日本 語・日本文学・日本文化修士 課程	2006 年 12 月 2 日～ 2006 年 12 月 18 日	的場 昭弘 (國弘 暁子)	ブラジルにおける日本マンガ のローカル化プロセスに関す る研究
Oleg BENESCH	ブリティッシュ・コロンビア大学 アジア研究専攻博士課程	2006 年 11 月 20 日～ 2006 年 12 月 4 日	橘川 俊忠 (丸山 泰明、本田 佳奈)	1895 年～1945 年においての 武士道精神の発達について
2007 年度				
氏 名	所属研究機関等	受け入れ期間	指導教員 (チューター)	研究課題
NISHIMURA MASHIBA 西村 真志葉	北京師範大学ポストドクター	2007 年 7 月 25 日～ 2007 年 8 月 7 日	中村 ひろ子 (土田 拓)	公私研究機関における非文字 文化再構成の実践についての 調査研究
YI XIAOLONG 衣 曉龍	華東師範大学博士課程	2007 年 7 月 26 日～ 2007 年 8 月 8 日	田上 繁 (彭 偉 文)	浮世絵の中の日本らしさ
JIANG MINGZHI 蔣 明智	中山大学非物質文化遺産研 究センター教員	2007 年 10 月 1 日～ 2007 年 10 月 14 日	山口 建治 (王 京)	中日龍母伝説と信仰比較研究
グラウジョール・カルロス	サンパウロ大学大学院日本	2007 年 10 月 1 日～	孫 安石	民族性

GLAUJOR CARLOS	語・日本文学・日本文化修士 課程	2007 年 10 月 17 日	(ムンシ・ロジェ・ヴァンジェラ)	
XU HAIHUA 許 海華	浙江工商大学日本語言文化 学院教員	2007 年 10 月 10 日～ 2007 年 10 月 23 日	河野 通明 (小野地 健)	明朝の地図や絵画に見られる 日本の認知について
PETRUCCI MARIA GRAZIA	ブリティッシュコロンビア大学 博士課程	2007 年 10 月 28 日～ 2007 年 11 月 11 日	田島 佳也 (佐々木 弘美)	日本の海賊とポルトガル商人 の経済的・宗教的つながり